



日本人の健康を支えてきた食材が、
現代のために生まれ変わりました。



10月3日新発売!



豆腐、納豆、味噌、醤油…。大豆はここ数年、世界一長生きの国、日本の食生活を支えてきた食材として、あらためて注目を集めています。ソイジョイは、そんな栄養豊富な大豆の粉だけでつくった生地に、たっぷりのフルーツを加えて焼き上げた新しい携帯食。「大豆まるごと」製法を採用しているので、大豆タンパク、食物繊維、イソフラボンなど、大豆の栄養をあますところなく摂取できます。大豆の優れたチカラを、いつでもどこでも、おいしくスマートに。ソイジョイは、スピーディな時代に生きる現代人のココロとカラダを満たします。

フルーツたっぷり、まるごと大豆バー。ソイジョイ

<http://www.otsuka.co.jp/soy/>

商品に関するお問い合わせ先:大塚製薬お客様相談室 TEL. 03-3293-6111



第7回 JCF 学生映画祭 公式パンフレット

Step up to the Future!

あなたの未来の可能性をもっと広げるために

マイクロソフト ステップアップ スクエア ニュース

全ての学生と教職員の皆様を対象としたマイクロソフトのニュースレター！
これからのIT業界を担っていく皆様、必読です！

<http://www.microsoft.com/japan/academic/letter/>

マイクロソフト ステップアップ スクエア ポータル

学生と教職員のための総合支援サイト！
まだ学生の方も、これから社会へと羽ばたかれる方にとっても
役に立つ様々な情報を取り上げていきます！

<http://www.microsoft.com/japan/academic/>

ステップアップ スクエア カップ

デザイン画像やショートフィルムなど、
様々なテーマで開催しているミニコンテスト。
優勝者には豪華賞品をプレゼント！
チャレンジして自分の可能性を広げてよう！

<http://www.microsoft.com/japan/academic/sdl/>



「いま、会いにゆきます」の市川拓司の名作、待望の映画化！

生涯ただ一度のキス ただ一度の恋



ただ、君を愛してる

HEAVENLY FOREST

玉木 宏 宮崎あおい

小出恵介 上原美佐 青木崇高 大西麻恵／黒木メイサ

原作：市川拓司「恋愛寫眞 もうひとつの物語」（小学館刊） 監督：新城毅彦 主題歌：大塚 愛「恋愛写真」[\[avex trax\]](#)
脚本：坂東賀治 音楽：池 賴広 製作：STUDIO SWAN 並映 エイベックス・エンタテインメント 小学館 スカパー・ウェルシング SWANフィルムパートナーズ 製作販売：インディペンデント・フィルム・ファンド 支援：企文化院 配給：東映

「いま、会いにゆきます」
市川拓司の名作 25万部突破 「恋愛寫眞 もうひとつの物語」×主題歌・大塚 愛の名曲「恋愛写真」

10.28 [SAT] 恋をしたくなる、今年最高のファンタジー

www.aishiteru.jp



フォトアルバム付 前売券発売中!! 一般1300円(税込) 剧場窓口にて

[劇中写真2枚入り]

おなくなり次第終了いたします



この学生映画祭も今年で7回目を迎えることができました。今までこの映画祭を支えてくださった学生の皆様、及び支援してくださった方々のお陰と感謝しています。

私はこの素朴な映画祭を心より愛しております。この映画祭は映画好きの学生たちの作品を発表し、新たな才能と感動に出会い、互いに刺激しあう場所であると思っています。

いつの日か、参加した皆様の中から一人前の監督として、良い作品を作り、多くの観客に喜びや悲しみを与えてください。

映画は映像や音楽を通じて人々に夢と感動を与えます。そして観客の拍手と不満を謙虚に受け止め、成功しても失敗してもあきらめず夢を追いかけてください。国内に向けてばかりではなく、世界を視野に入れた映画作りを心がけて欲しいと思います。

最後に、この映画祭は学生の皆様にとって、映画作りのスタートの場所であり、忘れられない場所であって欲しいと願っております。



JCF学生映画祭実行委員長
高秀蘭
(映画プロデューサー)

夕張の地に産まれたこの映画祭は、第4回沖縄開催以降、東京と地方を隔年で開催地とし、今年で第7回を迎えることができました。関係各位には心から感謝申し上げます。有難うございます。このJCF学生映画祭を通じて、参加するすべての人が多く仲間を作り、映画にかかわることの喜びを感じてくれることを願います。



JCF学生映画祭プロデューサー
太田 雅人
(JCFスカラシップ委員長／株式会社GETTI代表取締役)

JCF学生映画祭は、1999年のゆうばり国際ファンタスティック映画祭の学生部門として幕を開けました。そして今年で第7回目を迎えるこの映画祭は、映画製作を志す学生の才能を発掘し、最終的には眞の意味での映画人を輩出する場として機能することを目的としています。

学生全体の映画文化を向上させ、それが将来的には日本の映画文化の発展へと繋がっていくことが私たちの願いです。

開催情報

2006.9.23(sat), 24(sun)
一日券 ¥500／二日券 ¥750

東京国立博物館 〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9
平成館大講堂（本会場）
本館特5室（授賞式会場）

第7回JCF学生映画祭 Official Web Site
http://www.campusnavi.com/jcfmovie/jcfmovie_7th/

コンペティション部門 → P.6～15

本映画祭におけるコンペティション部門では、「監督の哲学を感じさせる作品」を求め、全国の大学・専門学校からの応募を募りました。結果、過去最多の139作品の応募を頂きました。事前的一次審査、二次審査を経て、本会場での最終審査上映では10本の最終ノミネート作品が上映されます。グランプリ監督に対しては、次回作製作の機会を与えるスカラシップ制度が適用されます。また、グランプリ、準グランプリ、佳作の入賞3作品に対しては、賞状と副賞が贈られます。

JCFスカラシップ制度 → P.16,17

JCF学生映画祭のグランプリ受賞監督には、「JCFスカラシップ制度」が適用されます。「JCFスカラシップ制度」とは、資金・設備・人材などの面から次回作の製作をバックアップし、プロのスタッフと映画を製作する機会を与えるプログラムです。第3回の映画祭から発足し、第4回のグランプリ、第3位受賞者と、第5回のグランプリ受賞者がこの「JCFスカラシップ制度」の適用を受け、次回作を製作しました。

セミナー部門 → P.19

今回のJCF学生映画祭では「これからの日本映画」をテーマにセミナーを行います。現在、日本映画界全体が「変わりつつある」という過渡期であり、まだ誰も見たことのない領域へと歩みを進めています。この過渡期を脱したとき、日本映画は一体どうなっているのでしょうか。映画セミナーでは、「これからの日本映画」を様々な角度から多角的に捉え、来場者に考えるきっかけを提供したいと考えています。このセミナーが参加者にとって、起爆剤となり、今後の映画制作の指針、映画との関わり方を考えるきっかけとなれば幸いです。

Guests

森直人（映画評論家）／高橋泉（映画監督・脚本家）／廣末哲万（映画監督・俳優）
／市川南（映画プロデューサー）／池内博之（俳優）／忍成修吾（俳優）／榎英雄（俳優・監督）

Interview Series 「映画人の映画の話」 → P.24～32

第一線で活躍する映画人の思いや姿勢を、映画界を志す若者に向けて届ける。それがインタビューシリーズ「映画人の映画の話」です。

映画制作をしたい、映画をプロデュースしたい、映画に出たい。そんな若者にとって映画人の学生時代や映画に対する思い、現場のお話は、刺激となり映画に対する考え方や関わり方を深めるきっかけになることでしょう。

JCF学生映画祭では、映画祭当日だけではなく、年間を通じて、映画界を志す学生のための情報を提供し続けています。

Interviewees

稲垣湧三（撮影監督）／奥田瑛二（映画監督）／西川美和（映画監督）／森田芳光（映画監督）／危山千広（映画プロデューサー）／市川南（映画プロデューサー）／池内博之（俳優）／忍成修吾（俳優）／榎英雄（俳優・監督）

コンペティション部門

Competition

第7回JCF学生映画祭のコンペティション部門では、「監督の哲学を感じさせる映画」という、明確な作品像を設定した上で作品募集を行い、全国から139作品ものご応募を頂きました。

映画のみならず、ものづくりという行為は、ひとつひとつの「世界」や「夢」を創出するものです。映画製作においては、監督が生きて来た中で培われた想いや考えこそが、云わば「哲学」となり、「作品のテーマ」、「語り口」、「手法」に表れ、映画の中で独自の空気を創り出します。そしてそういった哲学が強く押し出された作品は時に、観る者の世界観をも変えてしまうほど大きな力を持ちます。そんな「監督の哲学を感じさせる映画」こそが、これから映画界に風穴を開け、さらなる日本映画の発展へと繋がっていくのではないかでしょうか。だからこそ第7回JCF学生映画祭では、作品のジャンルは一切問わず、監督の作家性・映画の世界観が強く打ち出された作品を求めてまいりました。

しかしその一方で、学生映画は独りよがりで自己満足に終始したような作品が多い、という印象が強いのは事実です。実際、事前審査にご協力頂いた映画会社・映画学校の方々からもこういった感想は多数ありました。

そこで少し考えてみたいことがあります。

多々ある表現手段からなぜこの139名は、「映画」を選んだのでしょうか。皆、映画から力を貰い、映画の力を信じ、それを己の手で表現したい、伝えたいという強い想いがあったから、彼らは創り手、つまり「監督」として映画の世界に足を踏み入れたのだと思います。

こういった映画に対する表現欲求の種があり純粋すぎたからこそ、独りよがりな作品として捉えられてしまったかもしれません。しかし、何を表現するにせよ、始まりはそこからではないでしょうか。創造、表現することは、自己をさらけ出すということでもあります。身を持って受けた映画の偉大な力を、己の力に変えるには相当の勇気と時間が要されます。

誰に言われたからでもなく、ただ純粋に生まれたその表現欲求で、映画と真っ向かに向き合いはじめた監督には、これからも作品を創り続けていただきたいと願っております。

第7回JCF学生映画祭実行委員会

第一次審査

JCF学生映画祭事務局による審査を行います。学生が創った作品を、時代感覚が似通った同世代の学生が観ることで、その作品の「今」をよりストレートに感じ取れる。厳密な討議により審査を行い、二次審査に進むべき作品を選出します。

第二次審査

一次審査で選出された作品に、プロの視点を盛り込むべく、二次審査では実際に映画界で活躍している映画会社・映画学校の方々が、一作品につき2名で審査を行います。二段階に分けて行う二次審査では、多くの映画会社・映画学校のご協力により、それぞれ別の審査員が作品を鑑賞し、すべての作品に対してのコメントを応募者の皆様にお返しします。

最終審査

幅広く映画、監督と関わってきた方々による最終審査を行います。

佐々木 史朗 Shiro Sasaki

株式会社オフィス・シロウズ代表、早稲田大学大学院客員教授

1939年、大連市生まれ。TBSテレビ演出部勤務後1970年、(株)東京ビデオセンター設立。1979年より(株)日本アートシアター・ギルド(ATG)代表を兼務。1985年、第1回東京国際映画祭ヤングシネマ部門プロデューサー。1993年(株)オフィス・シロウズ設立。主として新人監督作品のプロデュースを行っている。

代表作品
「ヒボクラテスたち」(大森一樹)、「家族ゲーム」(森田芳光)、「転校生」(大林宣彦)、「逃霊」(根岸吉太郎)、「ガキ帝国」(井筒和幸)、「20世紀ノスタルジア」(原野人)、「ナビイの恋」(中江裕司)、「さう桂」(平山秀幸)、「ごめん」(富屋森)、「ホテル・ハイビスカス」(中江裕司)、「カナリア」(塙田明彦)、「スクラップ・ヘン」(李昌日) 他42本



日ごろ映像を作ることを仕事にしている私たちは、それが作り手の感性や表現欲を素直に伝えるものになっているのかどうか、わからなくなることがあります。そんなときに、ふと見た映画にドキリとする発見をさせられるのもよくあることです。難しそうにみえていた結び目が簡単にほどけた、という感じ。ハリウッドのエンターテイメントであれば、学生の自主製作であれ、私たちにとって刺激的であるなにか。そんな発見を期待しながら、スクリーンに向かいたいと思っています。

掛尾 良夫 Yoshiro Kakeo

キネマ旬報映画総合研究所所長。(株)キネマ旬報社常務取締役、映画専門大学院大学教授、NHKサンダンス国際賞、国際審査員、ソウル・フィルム・フェスティバル国際審査員、『地域でムービー協会』会長、『キネマ旬報』前集良編集長。

著に『映画プロデューサーの基礎知識』、『映画プロデューサー求む』、『外国映画ビジネスが面白い』、『映画プロデューサーが面白い』



今、映画製作のハードルがどんどん下がっている。今年で28回目を迎えたくびあフィルム・フェスティバルがスタートした当初は、「誰もが映画監督になれる」というようなことが掛け声となっていたと思うが、それが今や現実のものとなっている。世界中で多くの才能が個人の映画作りから誕生している。そして、その上映、評価の場としての映画祭は重要な役割である。映画製作を目指す人たちにとって、チャンスは大きく広がった。しかし、その一方で、あまりに安易に作られた作品も多く見られるようになった。映画祭運営者も応募するクリエイターも、真剣に勝負してほしい。

川上 皓市 Kouichi Kawakami

撮影監督。

46年東京生まれ。多摩芸術学園映画学科卒。フリーの撮影助手としてスタートし、78年「サード」で撮影監督。80年「四季・奈津子」で芸術選奨文部大臣新人賞、三浦賞、日本映画技術賞、柴田英三賞を受賞。92年「橋のない川」で、毎日映画コンクール撮影賞を受賞。最新作は、「紙屋悦子の青春」(黒木和雄監督)岩波ホールで上映中。



第7回JCF学生映画祭の開催、おめでとうございます。ビデオ・デジタル技術の発達で、誰もが簡単に映像作品を作ることができる時代になったと言えます。しかしその反面CG多様の、あるハリウッド大作について、「物語にCGを奉仕させるのではなく、CGに物語を奉仕させよとしたことで、衰弱がさまざまと見て取れる」という意見や、「当世流行のCGは表現を退廃させる危険を孕んでいる。人間も物語も、なおざりにしがちだ。そういう映画は最も古びやすいのではないか」という意見もあるのです。その意味で、当映画祭が求める作品像の「監督の哲学を感じさせる映画」というコンセプトは、全く正しいものだと言えるのだと思います。皆さん的作品を観ることを心から楽しみにしています。

小西 啓介 Keisuke Konishi

株式会社ファンタム・フィルム代表取締役
監修・宣伝プロデューサーとして『鉄腕男と桃尻女』『PARTY』『ヴァージン・スーサイズ』など渋谷系単館映画作品を次々に大ヒットさせる。また『ナイン・ソウルズ』『アイデン&ティティ』『ロスト・イン・トランセーション』などでは、プロデューサーごも務め、製作から配給・宣伝までトータルに関わり大ヒットに結びつける。2003年、ファンタム・フィルム設立。日本映画の企画・製作・配給・宣伝から洋画の買付けまで幅広く展開中。



学生の皆さんには映画業界の内側はご存知ないと思いますが、作り手、送り手含めはっきり言って人材不足です。残念ながらこの業界に魅力がないのか、マーケットが小さいからなのか、それとも我々に見る目がないのか、色々な意味で新しい才能や優秀な人材になかなか出会えません。それに出会うチャンスもあまりありません(積極的に探していないとも言えます)。逆から言えば、映画業界にはそれだけ若い人が活躍するチャンスが埋もれているということです。その意味でこういった出会いの場としての映画祭は非常に有益な場になります。是非、継続して続けて頂きたいと思っています。

中村 義洋 Yoshihiro Nakamura

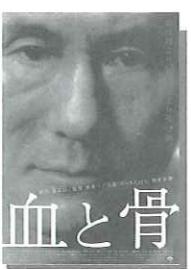
1970年茨城県生まれ。大学在学中より映画研究部に所属し8mm映画製作を始め『五月雨廻戻』が93年のPFF(ぴあフィルムフェスティバル)で準グランプリを受賞。卒業後、崔洋一、伊丹十三、平山秀幸らの作品に助監督として参加した後、97年に自主製作作品『ローカルニュース』を監督(99年公開)。以降、様々な映画の脚本家として名を連ねつつ、監督作品を発表し続けている。



自主製作映画には「粘土の理論」なるものがあると思う。映画を彫刻に例えて、商業映画の傑作がロダンの「地獄の門」だとすると、シロウト、学生が「地獄の門」を作ろうとしても容易に作れるものではない。僕は、自主製作の監督が「地獄の門」を作ろうとする姿勢が嫌いだ。作りたかったらロダンに弟子入りしなきゃダメだ。つまり助監督だったり制作部だったり、なんとかして映画の現場にもぐりこめばよい。君たちの目の前には、粘土しか用意されていない。粘土に自分の魂をぶつけるしかない。色を塗ったり電動仕掛けにしたり、そういう小細工もしてはいけない。自分の手で、こねて崩し、ちぎって貼り付けるだけだ。そんな、彫刻以前の、肉厚な粘土細工を見てみたいと思う。



(C)2003 「ジョゼと虎と魚たち」フィルムパートナーズ



二次審査協力各社

株式会社「M」エンタテインメント

二次審査協力各社

Sponsors

■会社概要

株式会社アイ・エフ・ジェイより、株式会社IMJエンタテインメントとして分社・独立。映画製作業務を主としたエンタテインメント事業を行なう。「黄泉がえり」「ジョゼと虎と魚たち」「NANNA」などを製作。犬童一心、大谷健太郎、SABUなどの監督とエージェント契約を結んでいる。8月26日より「親指さし」「ラフ」が公開。

■会社概要

日本国内及び海外での映画、DVD等の各種映像コンテンツ及び原盤の企画、制作、配給、輸出及び販売を行ない、また、オンラインゲームの企画・運営、コンピュータのソフトウェア及びゲームソフトの開発及び販売などのインターネットサービス事業を行なう。

■会社概要

1986年の設立以来、洋画の買付け、配給を中心とした事業を行なう。「黄泉がえり」「ジョゼと虎と魚たち」「NANNA」などを製作。犬童一心、大谷健太郎、SABUなどの監督とエージェント契約を結んでいる。8月26日より「親指さし」「ラフ」が公開。

1 当社は複数の映画監督と一緒に、一過性の「点」ではなく「線」として長期的な視野で企画・製作に取り組んでいます。未来を担う学生クリエイターの発掘・育成は重要なことです。と考え、審査員をさせていただきました。

2

美しい映像が多く見受けられました。「物語る」ということにもっと重点を置いていました。

3

テーマとモチーフを分けて考えてみるべきではないでしょうか。今回多く見られた内省的なテーマを伝えたのであれば、観客が興味を持つ題材の中にそのテーマを織り込んでゆくことが肝要かと思います。登場人物がテーマを独白するのではなく、映画なのですから映像で物語を紡ぐよう心掛けてほしいです。

1 映画に携わるものとして、映画製作を目指す学生の役に少しでも立てればと思ったことと、監督の哲学を強く感じさせる映画を求めていた映画祭の主旨に賛同しましたから。

2

独自性のある映像作品があり、とても見応えがありました。

3

今後作品を撮り続けていく上で、様々な困難や現実に直面することだと思いますが、今現在の自分の哲学や映画に対する想いというものは強く持続けて、映画に開拓けて欲しいと思います。

4

お疲れ様です。とても楽しく拝見させていただきました。他にはどんな作品を抱えているのかな、次はどんな作品を撮るのかなあと、とても興味を持ちました。自分がオリジナリティを極めたとき、その時は誰もが認める映画監督になっているのだろうと思います。ぜひ一緒に日本映画界に旋風を巻き起こしましょう！

1 映画から撮影、監督まで学生で行なうということと、学生の技術力に興味を持ち、映画祭の審査員を受けました。が、実際映画を観てとてもびっくりしました。すっかりハマってしまいました。とても楽しく映画祭の審査員をやらせていただきました。

2

審査員を引き受け、観た作品の中には技術力もありながら、物語の軸を感じさせるすばらしい作品もあり、映画として訴えるものはないが、それでも見ている間中様々な事を考えさせられる作品もあり、とても良かったです。

3

今後作品を撮り続けていく上で、様々な困難や現実に直面することだと思いますが、今現在の自分の哲学や映画に対する想いというものは強く持続けて、映画に開拓けて欲しいと思います。

4

学生監督一人一人の「意図」と表現方法はそれぞれ違っていて、その「意図」が観客にちゃんと伝わるよう工夫を、「何としてもこの映画の面白さ、素晴らしさをほかの人に伝えたい」ということに真剣に取り組んでいたところも、とても印象的でした。

1 今の時代と若者はどのように向き合っていて、そのことを映画でどう表現しているのかを知りたくて引き受けました。もちろん先々で一緒に出来るような素敵な才能と出会えないだろうかという下心もありました。

2

時代との切り結び方を表す

音響、映像技術などは正直荒々しいものが多く、見るに耐えなものもあつたけれど、どの作品からも監督の映画好き、熱意というものは感じることが出来ました。

3

学生監督一人一人の「意図」と表現方法はそれぞれ違っていて、その「意図」が観客にちゃんと伝わるよう工夫を、「何としてもこの映画の面白さ、素晴らしさをほかの人に伝えたい」ということに真剣に取り組んでいたところも、とても印象的でした。

1 訴論ではなく現役のスタッフとして、映画を見てみたいという純粋な気持ちのほか、この映画祭を学生自身が運営しているということがとても興味深く、意味あることだと感じたからです。

2

音響、映像技術などは正直荒々しいものが多く、見るに耐えなものもあつたけれど、どの作品からも監督の映画好き、熱意というものは感じることが出来ました。

3

映画演劇は人の感動をいただける楽しい仕事です。自己主張を悪く伝えればわがまま、とか自己中とか言われます。人の感動を考えて制作すれば個性的と言われます。人に感動を与える仕事です。その感動をパワーアップできる幸せな仕事です。常にnext oneです。がんばってください。

1 学生の創るフレッシュな映画を見てみたいという純粋な気持ちのほか、この映画祭を学生自身が運営しているということがとても興味深く、意味あることだと感じたからです。

2

音響、映像技術などは正直荒々しいものが多く、見るに耐えなものもあつたけれど、どの作品からも監督の映画好き、熱意というものは感じることが出来ました。

3

音響や映像技術など、技術力を高めていくのももちろん必要ですが、自分の作品に対して色々な感想をもららうことはより貴重で、勉強になることだと思います。

4

この貴重な経験を大切に、謙虚に受け止めて、今後も作品を撮りつづけてください。

1. どうしてこの映画祭の審査委員を引き受けようと思ったのか？
2. 実際に審査をしてみての印象は？
3. 学生監督に向けてメッセージ

■会社概要

当社はスポートとカルチャーをテーマに劇場用映像やテレビ番組の企画、あらゆるスタイルの映像の企画・製作を手がけている。また、当社のグループには「エンジニアリング」「スケール」があり、とりわけ映画の企画製作においてはグループを横断して取り組んでいる。代表作品は「安藤組外伝 群狼の系譜」「HYSTERIC」「不確かなメロディー」「DOG STAR」「サンクチュアリ」など。

■会社概要

1998年6月に設立。1999年にLPレコードを立ち上げ、ビデオメーカーとして、自社作品の販売を開始。劇場公開作品、CDドラマ、舞台演劇の企画・製作及び2004年より俳優の育成を手がけ現在に至る。代表作品は「あなたを忘れない」(2007年初春全国公開)、「イヌゴエ」(※秋より続編の製作が決定)、「くりいむレモン」、「戦シリーズなど。

■会社概要

洋画邦画問わず幅広い映像商材を企画制作販売している、トータルプロデュースカンパニー。全国劇場展開する大作から単館系邦画、TVシリーズ、ドキュメンタリーまでジャンルを越えた作品を年間約8タイトル創出し、代表作は「あなたを忘れない」(2007年初春全国公開)、「イヌゴエ」(※秋より続編の製作が決定)、「くりいむレモン」、「戦シリーズなど。

■会社概要

洋画、テレビドラマ、3DCGアニメーション等の企画・制作・販売を行なう。CM各分野のプロデューサーを中心とした総合映像事業者である。「ランブルフィッシュ」ブランドとして独自性のある映像制作会社である。制作作品の権利運用、商業販売、プロモーション等、企画から販売までの一括して手掛ける総合映像制作会社である。

■会社概要

洋画邦画問わず幅広い映像商材を企画制作販売している、トータルプロデュースカンパニー。全国劇場展開する大作から単館系邦画、TVシリーズ、ドキュメンタリーまでジャンルを越えた作品を年間約8タイトル創出し、代表作は「あなたを忘れない」(2007年初春全国公開)、「イヌゴエ」(※秋より続編の製作が決定)、「くりいむレモン」、「戦シリーズなど。

■会社概要

洋画、CM各分野のプロデューサーを中心とした総合映像事業者である。「ランブルフィッシュ」ブランドとして独自性のある映像制作会社である。制作作品の権利運用、商業販売、プロモーション等、企画から販売までの一括して手掛ける総合映像制作会社である。

■会社概要

洋画邦画問わず幅広い映像商材を企画制作販売している、トータルプロデュースカンパニー。全国劇場展開する大作から単館系邦画、TVシリーズ、ドキュメンタリーまでジャンルを越えた作品を年間約8タイトル創出し、代表作は「あなたを忘れない」(2007年初春全国公開)、「イヌゴエ」(※秋より続編の製作が決定)、「くりいむレモン」、「戦シリーズなど。

1. どうしてこの映画祭の審査委員を引き受けようと思ったのか?
2. 実際に審査をしてみての印象は?
3. 学生監督に向けてメッセージ

**ESP/UTB
映像アカデミー****■学校概要**

「映像業界に就職することにこだわった超現実主義校」。マスコミ業界に就職するために必要なものは「知識」「経験」「人脈」この3つです。この3つが手に入るのはESP/UTBだけです。「学歴」や「センス」はあまり関係ありません。年間100本の受注制作と100%プロの講師陣だから当然就職率も100%!

1
大学生が創る作品のレベルの確認と自由な発想の中でのぞだけ面白いものがあるか見たかったため。

2
思っているよりも完成度が高いものが多く良い意味で裏切られたが、プロで通用するレベルかと考えると少し考えていました。

3
自分の創りたい作品を創るのは当たり前ですが、それが自慰行為にならないように心かけてください。

**東北新社
映像テクノアカデミア****■学校概要**

「映像総合プロダクション東北新社が運営母体の映像学校。映画学科、映像クリエーター科、CMクリエーター科、映像翻訳科、声優俳優科の5学科による構成。どの学科にも、東北新社のスタッフや業界の第一線で活躍されているエキスパートの方々を講師に迎え、現場に密着した「本物の実践教育」を行なっています。」

株式会社パル企画**■会社概要**

創立25周年を迎えるパル企画では、「オキナワの少年」、「犬と暮せば」、「紙屋悦子の青春」(06年8月12日より岩波ホールにて公開中)等の映画を中心には、「ほんとにあった! 喜いのビデオ」シリーズなどビデオ作品、その他TV、CM等多くの作品を制作しています。代表作は「オキナワの少年」(1983年)、「犬と暮せば」(2004年)、「紙屋悦子の青春」(2006年)など。

1
事務局の熱心な要請に基づいて引き受けました。また当校におきましても映画学科があり、応募作品と比較してみたい欲求にかられることも確かです。

2

直に言わせていただければ、期待したほど完成度が高くありませんでした。どの学生映画コンテストにも見られる程度のレベルです。

3

映画は必ず観る人がいます。映像コンテストは辛抱強い審査員が最後まで観てくれます。一般的上映では面白くなければ途中で席を立たれてしまします。作品に情熱を傾け、創造力をかぎ立てることはもちろん必要ですが、その過程で自分の中に観客の目、客観性を持つことがプロの道につながります。

**アルゴ・ピクチャーズ
株式会社****■会社概要**

1990年映画製作・興行・配給を手掛ける会社「アルゴ・プロジェクト」として設立。96年よりアルゴ・ピクチャーズと社名を変え、映画以外も含めた映像製作および配給宣伝を中心として「福耳」「犬と歩けばチャロリ」とタムラ「ヨコハマメリー」等を送り出す。最新作は9月23日公開「紀子の食卓」(園子温監督)。

1
本年度より企画、運営をすべて学生の手で行うということで面白い試みだと思います。個性を持った映画祭が増えることで、業界の活性化につながると感じ、協力させていただきました。

2

みんな自分の殻にこもりすぎ、そこから突き抜けるパワーが欲しい。

3

今後の可能性を感じる作品が多數ありました。ですから落選された方も映画作りをあきらめず、またチャレンジして欲しいですね。

1
実行委員の皆さんの熱意に負けて。

2
みんな自分の殻にこもりすぎ、そこから突き抜けるパワーが欲しい。

3
殻を打ち破って下さい。

**株式会社
ファントム・フィルム****■会社概要**

2003年12月に設立。外国映画の輸入、配給販売や日本映画の製作、配給、宣伝を主な業務として既に40以上の作品に携わる。本谷有希子原作「贈واجا」でも、悲しみの涙を見せろ、松田龍平、山口優主演「ブルゴギ」や作家乙一の映画化「暗いところで待ち合わせ」などの製作他、フランスやアメリカなどの共同製作なども積極的に展開している。代表作品は「ロスト・イン・トランスレーション」「スーパー・サイズ・ミー」「埋もれ木」など。

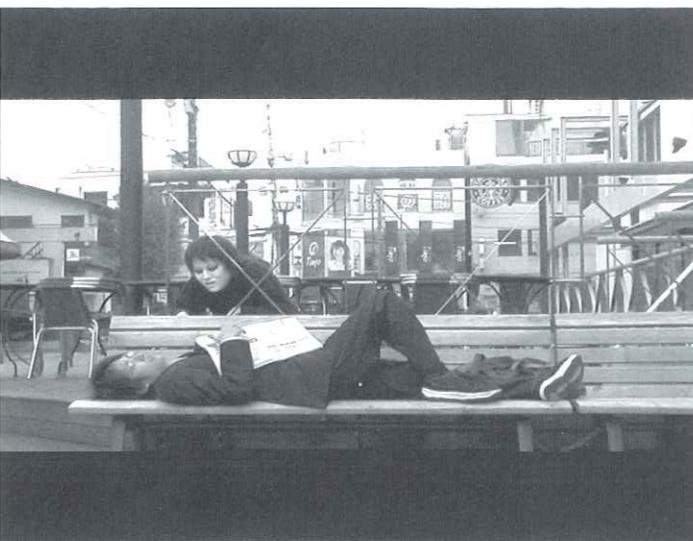
1
日頃から、今の学生さんがどんなことを考えているのかを知ってみたかったというのが本音です。作品や作り手の方だけでなく映画祭に関わっている方まで若い人ということに興味があったので。

2

技術(機材)の進歩と作り手のテクニックは昔より確実に上がっていると思います。ただその反面、無軌道なパワーというか規格外の作品が少なくなっているんじゃないでしょうか。

3

もっと色々なことに興味を持って勉強して欲しいです。学生時代ほど自由に自分の時間を使える時代はないので、とにかくそれを無駄にしないで欲しい。これは実感しています。

**Mess age**

描い所もたくさんあると思いますが、最後まで観ていただけたら幸いです。

なななか

21.5分、カラー

あらすじ

主人公の暮男は22歳の大学4年生。なんとなく就職活動をしている中、友人の松雄が死んだという訃報に入る。彼を葬る暮男。ところが数日後、彼は再び暮男の前に姿を現すのであった。なんでも、生前、漫才コンビを組んでいた相方に死の直前に思いついたネタをどうしても伝えたいという…

**Profile**

常岡 弦 (Yuzuru Tsuneoka)

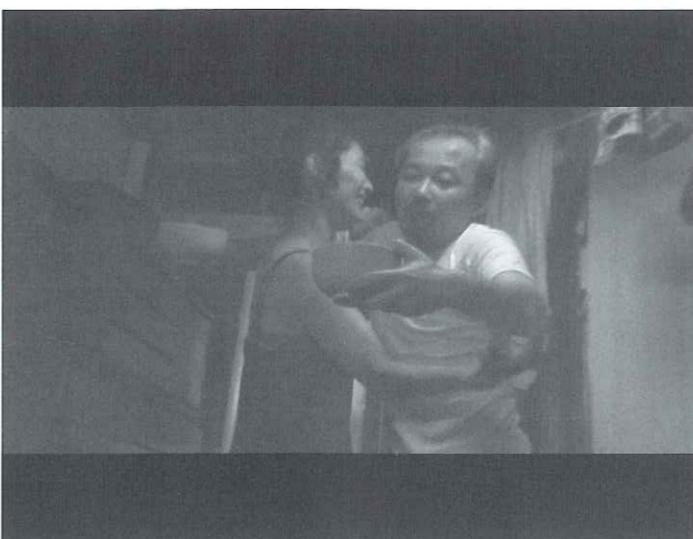
早稲田大学 4年
早稲田大学福門シナリオ研究会所属。
現在、就活中。

體でも讃めやがれ

74分、カラー

あらすじ

京子とすぐ夫の夫婦は、すぐ夫の双子の兄が亡くなったのをきっかけに保険金詐欺を企てる。貧乏な生活から抜け出せると喜ぶ二人だが…。

**Mess age**

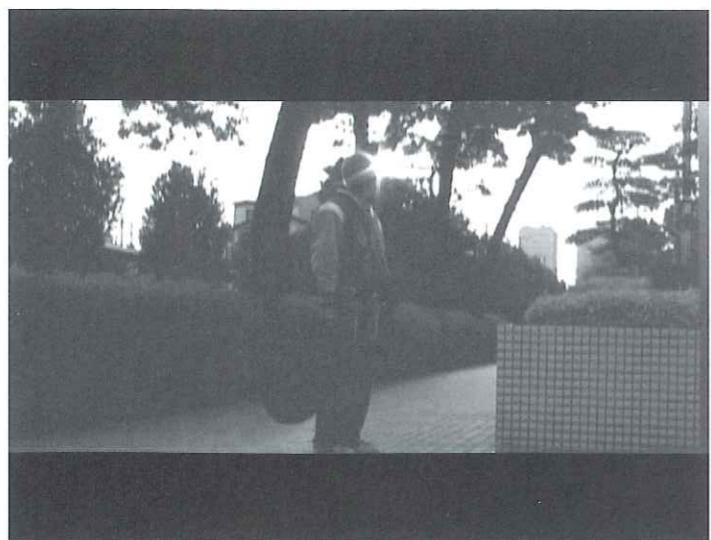
学生が作った映画、という事を意識せずに見ていただければ嬉しいと思います。

Profile

田原 雅仁 (Masahito Tahara)

パンタン映画映像学院 卒業
大阪出身。専門学校を卒業後、現在フリーで活動中。





路上ミュージさん

69分、カラー

あらすじ

プロのミュージシャンを目指して上京した和也。しかし父親、同級生、後輩、オーディション、様々なものが彼を「夢」から遠ざけ、彼自身も少しづつ現実から逃げ始める。長い東京生活の末に彼が出した結論とは。そして最後に彼が起こした行動とは。

Message

笑って泣ける映画になるように、一生懸命つくりました。挫折とか妥協とかのせいで、気づいたら「夢」とは別の場所に来ていた、そんな人々に是非観ていただきたい映画です。キャスト、スタッフをはじめ、協力してくださったすべての皆様に感謝。

Profile

鈴木 研一郎 (Kenichiro Suzuki)

早稲田大学 3年
映画研究会在籍。地元静岡県にて、路上ライブの経験あり。



歩行する季節

152分、カラー

あらすじ

大晦日の夜、上田と麻生はふとした拍子に世界から転落した。一月二月を過ぎても二人の中で除夜の鐘は鳴り続ける。鐘の音を止めるために、上田は部屋に閉じこもり、麻生は死も無く走り続けることにした。幼少の頃に罹った病のせいで、春子は体温を保てない。病は春子から温度の交換合いを奪った。春子は温度の代わりに色で季節を教え、常温の部屋の中で育つ。しかし初潮の訪れが熱の記憶を呼び覚まし、春子はそれに魅入られ、やがて「外へ」と思いを募らせていく。宛の無い行為が、見知らぬ誰かに届く事がある。麻生と春子は出会いわずして出会い、互いの存在を感じていく。いつか巡り会う予感を深めながら。



Message

戸田 栄弘 (Akihiro Toda)
近畿大学 卒業
奈良県出身。近畿大学演劇芸能専攻14期生。
チーズfilm代表。監督として第八回IMF入賞作「失われた時を求めて」「ヒメオト」等がある。



13月のカルテット

32分、カラー

あらすじ

奇数と偶数。肯定と否定。
1LDKの一室に住む3人の男女の、奇妙な共同生活。

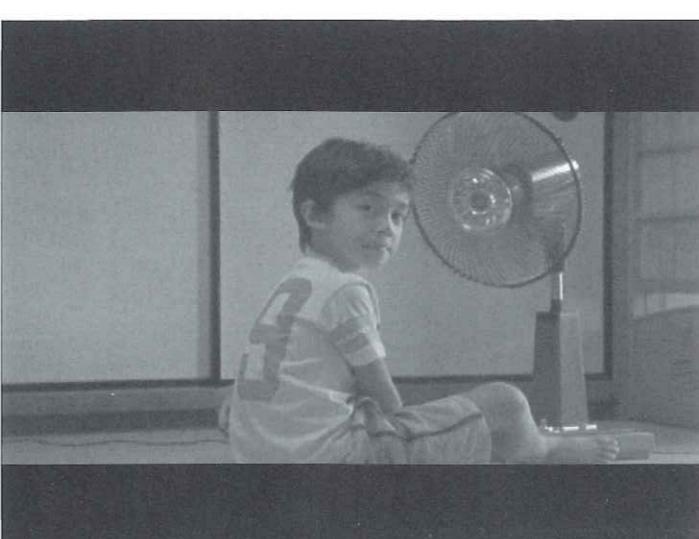
Message

伝えたいことなどありませんが、何か伝わるといいなあとは思います。色や音や、そういう原体験的なものに対する戦慄。そこからが、始まりだと思います。

Profile

富宇賀 直也 (Naoya Tomiuga)

早稲田大学 2年
一浪の末、早稲田大学第二文学部入学。本作が二作目となる。



青い背中

19分、カラー

あらすじ

子供を上手く愛せない母親と、愛情を知らない5歳の男の子の物語。
ある日、そんな二人の前に守護霊となった祖父が現れ…。

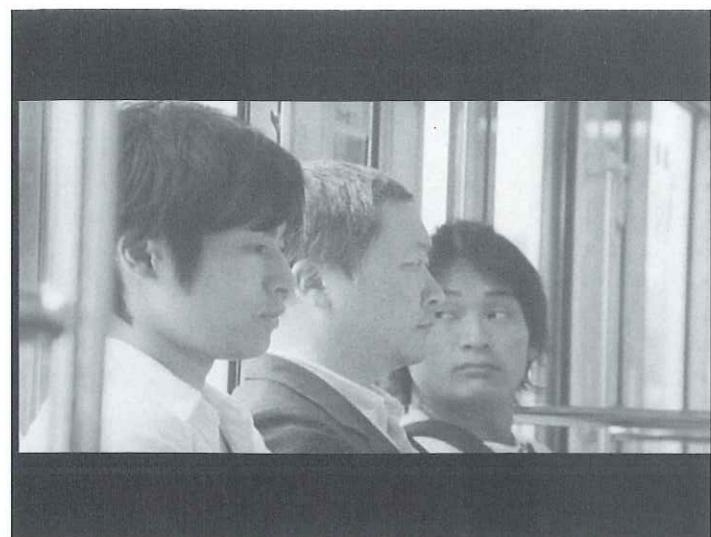


Message

制作するにあたって心がけた事は、シンプルに語り、シンプルに撮ることでした。そのため、この映画にはセリフがほとんどありませんし、登場人物も少なく、静かに物語は進んでいきます。

Profile

佐々木 世雄 (Seou Sasaki)
大阪芸術大学 4年
大阪芸術大学、映像学科在学中。大学入学当時から毎年映画制作をおこなう。また、友人達と立ち上げた映像制作団体「猫の会」に所属。



バオバブのけじめ

34分、カラー

あらすじ

「水橋のかっちゃんおるだろ、県庁入ったんだぞ。おまえどうなん？ 富山で働きはせんがんか？」と政義は言う。蒸発した和夫たちの母親を探すために親子三人は神奈川海岸に来たのにこの調子だ。そんな政義に対していちいち反抗的な態度をとる洋。叔父の目撃談だけで他にたいした手掛かりもなく、どうの昔にいなくなつた、思い出したくもない過去の存在になつてゐる母親の搜索に、和男はとまどいを隠せない。

Message

例えば「はなればなれに」のアンナカリーナであったり、「秋日和」の司葉子や「エヴァの匂い」のジャンヌモローのような、素敵な女性が登場する映画をつくりたいと日々思うのですがどうもうまくいかず、ならばこの欲望の対象を不在にしてみたら、と考えたのがこの作品です。

Profile

松浦 博直 (Hironao Matsuura)

映画美学校フィクション高等科
1981年富山県生まれ。大学から8ミリやビデオで自主映画をつくり始める。映画美学校にて今作を監督。



シェアリング

57分、カラー

あらすじ

都会の生活に憧れて、超ド級の田舎からでてきたエリとヨーコ。しかし2人が辿りついたのは地元とさほど変わりはない片田舎の町だった…。さびれた町で始まった女2人のシェアリング生活に突然加わるうさん臭さぶんぶん漂う1人の男。扉開けたら押し倒されるわ、キスマークはつきすぎだわ、ナース服は発見されるわ、大人のおもちゃまで出てくるわ。2人の品のない性生活の断片が嫌でも目につく狭いアパートの一室で、超びゅあな少女エリのガラスの心に傷がついていく…。がんばってるので垢抜けない、とほほ…なのになぜだか切ないガールズストーリー。



Message

清水 鮎 (Nao Shimizu)
大阪芸術大学 卒業
映像学科卒業。『夢のほとり』(友野祐介)『赤を覗む』(浅川周)等に参加。本作は初監督作品。



The Bounsing Souls

50分、カラー

あらすじ

ある地方都市。冬。大学の休みに久々に地元に帰ってくる。信之。地元の連れの、奈々子、武に迎えられる。その車の中から信之は、大きな黒い帽子をかぶり、黒い服を着た、長髪の、まるで、「魔女」のような人影を目撃する。その「魔女」のような格好をした女の子、希、は、全身に傷を持ち、人目を避けて、夜になると、こっそり外へでかけていた。信之が、興味本位で希に声をかけてたのをきっかけに、信之、奈々子さんに囲まれて、希は少しづつ、生き、はじめていく。

Message

それでも人生は続いているんだから。黙ってそばにいてくれたり、きっかけをくれたりする人がいるということは、本当に素敵で、頼もしいことです。

Profile

近江浩之 (Hiroyuki Omi)

大阪芸術大学 卒業
福島県生まれ、23歳。
2002年映像学科入学。2006年卒業。
今作品は、卒業制作にあたる、本人監督第2回作品。



こいのぼり

43分、カラー

あらすじ

新学期、夏の終わり。何も長続きしない中学受験生・足立涼は、乱暴な女子大生の家庭教師・早苗との勉強に飽き飽きしていた。そんなある日の下校中、バレリーナ・立花萤のレッスン風景をみつけ、虜になる。涼が練習場に通い続けていると、ふとした事から萤に言葉を交わされバレエスタジオに招かれ驚愕する。そこにはなんと「不思議な蝶」が空中を遊泳していたのだ。美しいバレリーナ萤とのプライベートレッスンのなかで涼は踊ることに夢中になり、自己を確立していく。憧れと現実、ダンスとファンタジーが目映く交差し、少年を1歩、大人に近づけていった……。



Message

辻下 直美 (Naomi Tsujishita)
慶應義塾大学 卒業
環境情報学部卒。現在明治製薬WEBドラマ「チョコレートの冒険！」シリーズ監督中。
デジタルハリウッド大学大学院
ストーリーマーケティングLAB所属
tel 090-3917-5372
mail nao@storymarketing.jp

"才能ある学生を次なるステージへ"

JCFスカラシップ制度とは、本映画祭コンペティションにおいてグランプリを受賞した学生監督にプロのスタッフと映画を製作するチャンスを与える監督育成プログラムです。資金・技術・設備の面でバックアップし、次なる映画製作のステージとして、よりよい環境を用意しております。本映画祭後に受賞監督とJCF学生映画祭スカラシップ委員会で面接を行い、スカラシップ生を決定します。支援内容は、資質や熱意などを考慮した上でスカラシップ委員会が判断致します。



JCF学生映画祭では、これまでに3名のスカラシップ生を輩出してきました。その中の一人、渡辺崇さん当時の想いやエピソードをお伺いしました。

「パンツを脱いで自分をさらけ出さない限りは、本当の映画はつくれない」

渡辺 崇

Takashi Watanabe

**1****スカラシップ決定**

僕が出品したのは、2001年2月のJCF学生映画祭でした。当然スカラシップを狙っていたので、「やったぜ」と思うと同時に安心しましたね。当時は卒業を控えた2月で、映画祭会場の夕張には卒業旅行のつもりで行きました。なんとなく映画の仕事をやろうとは思いつつも就職活動を全然していませんでした。それで、スカラシップが決まり、就職しないことの口実にもなるなどと思って、親に「仕送りを続けてくれ」とお願いしたわけです。その後、仕送り生活が2年間続くことになったんですが…(笑)。そんな恥ずかしい裏話もありつつ、すごく希望に満ち溢れていました。

2000年「パラグラフ」が東京学生映画祭グランプリを授賞。翌年に北海道夕張市で行われた第3回JCF学生映画祭へ「魚の脳みそ」を出品。第3位を授賞し2001年の「JCFスカラシップ作品」として原孝プロデューサーのもとドキュメンタリー映画「ウチをせかさんといつてある不登校少女の記録」を製作。1年にも及ぶ期間をかけて作品を完成させ、やまとが2003ドキュメンタリー映画フェスティバル、北京大山子アートフェスティバルなどで上映された。現在は、TV番組製作会社にてディレクターとして働きながら、その経験を糧に映画のシナリオを書き続けている。

シナリオを書く

実際に映画を撮り始めるまでにはすぐ時間がかかりました。2001年の4月から動き出したんですけど、まずは一人でひたすら企画を書いたり、シナリオを書いたりする作業が約半年間続きました。が、結局その内容がスカラシップ委員会の中で認められなかったんです。それで振り出しに戻り、10月くらいになってようやくどうするんだと仕切り直しになりました。僕が書いてきたシナリオの内容は「家族」の話だったんですけど、それを読んだスカラシップ製作プロデューサーの原孝さんに言われた一言が、「うわっつらな脚本だ。もっと自分を見つめたほうがいい。」というものでした。その話し合いの過程で、原さんが京都で企画している「チェンジ」という劇の話が上がりました。主人公を演じている不登校経験のある少女を中心にドキュメンタリーを撮ってみないかという話にならんです。ずっと劇映画をつくりたかったから、ドキュメンタリーを撮るなんてことは全く考えていませんでした。

つらだ、自分を見つめろ」という言葉の意味を本当に理解できたと思います。あと、原さんにはよく「パンツ脱げ」って言われました。結局、自分が本音で話さない限りは、周りの人も本音にならないという意味合いだったんですね。なかなか勇気がいましたよ、やっぱりカッコつけたいじゃないですか。ずっと自分の好きな世界や理想の世界を映画にしたいと思っていたから。きっと、そこを「うわっつら」って言われていたんですね。パンツを脱いで自分をさらけ出さない限りは、本当の映画はつくれないんだよっていうニュアンスだったと思います。

撮影開始

撮りはじめてからは、京都のウィークリーマンションに大学の後輩と住み込んで、自分でカメラを回す生活でした。ドキュメンタリーだから、人の普段しゃべらない部分とか、本音の部分を撮らなければいけない。だから、ただコミュニケーションをとるということ以上に、自分の考えや思いを話すことから始めたんです。テーマが不登校経験のある少女とその家族だったから、僕が中学生・高校生のときどんなことを感じていたかとか、僕の家族の話をしました。ドキュメンタリーを撮るときの軸足をどこにおくかというと、やはりシナリオのテーマと同じ「家族」しかなかつたんですよね。そういう意味で自分の家族をもう一回考え方で直すというフィードバックの作業になっていきました。だから、相手に意識を向かわせつつも、自分に意識を戻すということの繰り返しでした。

結果として、それが自分を見つめ直すことにつながっていったんですね。自分の考えたシナリオが認められなくて、すごく悔しい思いもしたけど、それができたから僕はスカラシップをやって良かったと思えたんです。そこでようやく原さんが言った、「うわっ

その後の人生

当時はとにかく自分の未熟さを思い知りました。それでもいつかちゃんと自分のシナリオで映画を撮りたいと考えるようになりました。でも映画を撮るのは今じゃなくてもいいなって思つたんです。まだ自分は未熟で、全然足りてないなって。今一生懸命書いても、そんなに面白いものは書けない。頭で考えただけのシナリオしか書けない。映画製作会社で助監督をするという考えもあったけど、映画撮影の現場を仕切っていくというよりはむしろ、自分でカメラを持って、いろんな人に話を聞きに行く方がいい。スカラシップでの経験で、そんな風に思うようになりました。

それでドキュメンタリーを制作しているテレビ番組の制作会社に就職することにしました。今はワイドショーを担当しているんですけど、ワイドショーの特集として、自分でカメラを持って、短いドキュメンタリーを撮りにいくわけです。色々な人に会って、何とかしてその人の考え方や、恥ずかしいところ、怒りをあらわにしているところを撮ろうとする。そういう経験を積むことが最終的に面白い映画をつくることにつながると思っています。

とは言ても実は、シナリオも一生懸命書いています。自分の経験をシナリオにフィードバックしようとは思っているんだけど、なかなか形にならないのが現状ですね。いまは書きかけのシナリオがいくつもある状態です。毎日一時間はシナリオを書くようにしているんですけどね。

スカラシップ製作が終わって丸4年経ち、スカラシップでの経験が形としてまだ何かに結びついたというわけではありません。でもまずは一つのシナリオを完成させ、絶対に近い将来監督として映画を撮りたいですね。それが僕の野望です。

先輩として

スカラシップの映画製作は、それまでの自主製作とは全く違いました。自分で面白いと思っても、他の人にも面白いと思わせない限り、撮影まで辿りつけない。はっきりいって、自分の力の無さを思い知りました。完成すれば絶対面白いという自信はあったけど、それは独りよがりだったのかも知れません。実際に今、当時のシナリオを読んでも、面白くないんですよ(笑)。「何をうぬぼれていたんだろうって。絶対的な経験が少なすぎたんですね。だからみなさんも、とにかく一回自分の考えを壊されてみたらいいんじゃないでしょうか?

過去のスカラシップ生

他にも、これまで2名の方がJCFスカラシップ制度によって、映画製作を行いました。

月川 翔さん

第5回JCF学生映画祭へ「パラノイア」を出品。グランプリを授賞し2004年の「JCFスカラシップ作品」として「函館港イルミナシオン映画祭」の第7回シナリオ大賞受賞作である「ノーパンツ・ガールズ」(作:森田剛行氏)を映画化する。昨年11月に劇場公開され本年3月22日にDVD化された。他にも「呼吸」「エクリプス」「僕は存在していた」などを制作。

仲井 陽さん

第3回JCF学生映画祭へ「鶴譚(ぬえたん)」を出品。グランプリを授賞し2002年の「JCFスカラシップ作品」として、オキナワコンテンツラボにて沖縄県協力のもと沖縄出身俳優、スタッフ等プロを起用した短編映画「364days」を製作。その後、オキナワ・ショート・ショート・フィルムフェスティバルの開会式にて上映された。またこの実績により学生の課外活動において優れた成果を挙げた者に贈られる2001年度「早稲田文化賞」を授賞。

- 「へなこ」/青木克彦
 「パリレリーナの穴」/日原進太郎
 「Round Sofa」/横山善太
 「電卓ボーイズ!」/河内大祐(本名:河内大祐)
 「沈黙」/竹林亮/安部拓也
 「THE LIFT」/竹林亮
 「カブトムシ」/大須賀康元
 「麻雀甲子園」/前田英行
 「セカンドウォーク」/加藤祐紀
 「復活と希望の村から~meanins of family~」/高橋慶太
 「PAS UN REGARD (パ・ザン・ルガール:NOT a glance)」/KANAME(小野山要)
 「落穂は拾えない」/要(小野山要)
 「地雷渦の中で~地雷を撤去する元クメール兵の生き方~」/閑根心
 「キャンパスブルース」/真壁幸紀
 「1/solo (ソロ)」/横山善太
 「AMBIGUOUS」/竹末和生
 「マイスイトフレンド」/角田裕秋
 「ダム・ガール」/児玉数士
 「八年目の女二人」/石井裕一
 「怪獣迷子」/小串遼太郎
 「倉知と夏衣」/大部剛
 「エンジェルフィッシュ」/酒井翔
 「DORMITORY」/浦和健太郎
 「カリーライフ」/田中惇也
 「超探偵A&B」/坊野一乗
 「ストック」/井上洋伸/佐藤剛平
 「はだしのファンファーレ」/杉村淳子
 「妹と犬とタバコと」/松浦健志
 「青い背中」/佐々木世雄
 「茜雲」/宮川拓也
 「漂う雲」/松浦健志
 「MONEY BAGS」/柴牟田竜郎
 「しあわせ日和」/伏見千穂
 「勿忘草を君に」/田井義輝
 「トンネル(Tunnels)」/ジェイヒューバート
 「プロモーションビデオ(オレンジレンジ:キズナ)」/佐藤良明
 「そらもアカ」/石川千寿子
 「The Third Gun」/田中俊輔
 「潜む者」/神大輔
 「yesterday,today+tomorrow」/北野拓
 「あまがさ」/中川信雄
 「for」/柳川薫平
 「Bare drop」/鈴木勇馬
 「地元に帰ったらみんな宗教入ってた。」/坂本太夫
 「内爆ぜ」/工藤鑑
- 「A Seaside House」/矢島佳佑
 「理想の彼女.com」/真壁勇貴
 「艶でも誉めやがれ」/田原雅仁
 「The Bounsing Souls」/近江浩之
 「怪盗ジョー&ビーナス」/横田穂
 「淨土と穢土」/大久保倫伊
 「Season,in our life」/角田裕秋
 「Smile in the Bucket」/清水美穂
 「バブロとガンダ」/秋山貴人
 「奇石(キセキ)」/岡田貴之
 「next morning」/清水香奈江
 「征服」/金素炯
 「FLUORESCENT (フルオレセント)」/COBUS VANSTADEN
 「バオバブのけじめ」/松浦博直
 「ヒメオト」/戸田彬弘
 「light」/丹羽克宏
 「歩行する季節」/戸田彬弘
 「ショウ」/櫛田涼介
 「KABE(カベ)」/齋藤大輔
 「みえない絆」/丹羽克宏
 「自動車あれこれ」/野田賀一
 「13月のカルテット」/富宇賀直也
 「不確かな未来のために」/真壁幸紀
 「いじめられっ子&ヤクザ」/豊島仁
 「灰色世界」/菅原有里
 「リシアンサス」/田中雅則
 「あなたの影武者、おつくりします」/田中雅則
 「どうしてイラク戦争にあの正義のヒーローは現れなかったか」/石井毅
 「なみだ色」/斎藤瑠
 「えすけーぶ、風呂む」/浅沼直也
 「紫」/加納隼
 「ジゴクエレベーター」/加納隼
 「ジュンシガタ」/豊里由香梨
 「シェアリング」/清水艶
 「黄金の父父(ちち)」/渡部直也
 「shelter.no.406」/堀池玄彌
 「暮れる陽と明ける陽の」/望月沙矢佳
 「梅雨にだって恋が花咲く時もある」/山田真須美
 「分別」/辻陽子
 「水の大師の姉弟」/今野裕一郎
 「人間の街」/嶺準樹
 「ヒナタ」/日黒啓太
 「戦え! サラリーマン!!」/永井祐平
 「MUKASARI」/佐藤卓
 「水女」/六郷祐介
 「Primrose」/高宏也
 「こいのぼり」/辻下直美
 「なななか」/常岡弦

セミナーテーマ 「これから日本の映画」

21世紀に入り、日本映画の様式は著しく変化し、今も現在進行形で変わりつつあると言われています。プロデューサーの台頭や原作ベースの映画の流行により、日本映画はハリウッドの大作を抑え、ヒット作が続出し、さらに、海外からのリメイクの依頼、映画祭での受賞などで、注目度が高まり、かつての「国産映画」のマイナスイメージは払拭されました。今回のJCF学生映画祭では「これから日本の映画」をテーマにセミナーを行います。現在、日本映画界全体が“変わりつつある”という過渡期であり、まだ誰も見たことのない領域へと歩みを進めています。この過渡期を脱したとき、日本映画は一体どうなっているのでしょうか。映画セミナーでは、「これから日本の映画」を様々な角度から捉え、参加者に考えるきっかけを提供したいと考えています。このセミナーが参加者にとって、起爆剤となり、今後の映画製作の指針、映画との関わり方を考えるきっかけとなれば幸いです。

「ジダイを担う映画人」

いつの間にか、日本映画はすいぶんと身近な存在になっています。これは、我々、観客側だけではなく、製作側にも言えることです。近年、若い才能を持った映画監督が続々とデビューしています。今回、第26回びあフィルムフェスティバルで会場の話題をさらう、今、最も次回作が期待されている映像ユニット「群青いろ」の高橋泉監督と廣末哲万監督をお招きし、学生映画監督と同じ「自主映画」というフィールドで、同じ道筋を辿ってこられたお二人に、映画製作や、映画に対する思いから、現代の日本映画についてお話をいただき、これからどのような道を歩み、映画と関わっていくのか、ご自身の今後の展望について語っていただきます。

「日本映画×サブカルチャー」

現在、日本映画のヒット作品の多くは、マンガおよび小説を原作とした作品となっています。さらにそこに人気アーティストの音楽が加わるなどして、映画は映画でありながらもあらゆるサブカルチャーをも巻き込んだエンターテイメントの集合体のような様相を呈しつつあります。一方でかつてからの作家主義的な作品も変わらず根強い人気を誇っていますが、目につく限りでは多くのヒット作品が前述のようなものであるように感じられます。このセミナー企画ではそのような日本映画の状況に焦点を当て、そこに見られるあらゆる要素(商業的から見る昨今のヒット作品、プロデューサー中心の映画製作、現在の日本映画界が必要としている監督像、など)から日本映画の現在、そしてこれからについて、幅広い知識で現在多くの映画批評、コラム執筆において活躍されている森直さんに語っていただきます。



高橋 泉

Izumi Takahashi

1973年埼玉県生まれ。2001年より廣末哲万とともに映像ユニット「群青いろ」を結成。廣末と自主制作で20数本の映像作品を制作する。2004年、新人シナリオコンクールにて、『日向雨』が最終選考対象作品に選出。同年、第26回びあフィルムフェスティバルで監督・脚本を務めた。廣末主演の『ある朝スヌブは』がグランプリ及び技術賞を受賞。同作は海外映画祭で高い評価を得て、劇場公開。自主映画としては史上初の監督協会新人賞を受賞。2005年、IMJエンターテインメントとエージェント契約を結び、脚本のオファーも相次ぐ。2006年、廣末が監督した、第16回PFFスカラシップ作品『14歳』の脚本も務めている。



森 直人

Naoto Mori

1971年和歌山県生まれ。近畿大学芸術学部卒。映画批評ほか、ライター、作詞など幅広く活躍し、「キネマ旬報」「流行通信」「テレビプロス」「クイックジャパン」「メンズノン」「この映画がすごい!」などに執筆。編著に「日本発 映画ゼロ世代」(フィルムアート社)など、著書に「シネマ・ガレージ 廃墟のなかの子供たち」(フィルムアート社)がある。また、向井秀徳(ZAZEN BOYS)主催の映画サークル「現代会」オリジナルメンバーでもある。



廣末 哲万

Hiromasa Hirose

1978年高知県生まれ。10代より小劇場を中心に演劇活動を行う。第26回びあフィルムフェスティバルでは廣末が監督・主演を勤め、高橋が脚本を担当した『さよなら さようなら』が準グランプリを受賞。同時入選でPFFの話題をさらう。2005年、高橋が脚本を担当した、初の長編作品『鼻喰泥棒』を監督・主演。ロッテルダム国際映画祭でネットバック賞を受賞し、海外映画祭からのオファーも相次いでいる。『14歳』でも主演を務め、市川準監督のCMや映画に起用されるなど、俳優としての将来も有望視される。今後の活躍が大いに期待される映画監督の一人である。

「たくさん観て、たくさん創って、たくさん捨てる」



名画座訪問

多くの著名な映画監督がかつて通っていた、池袋にある名画座『新文芸坐』(旧・文芸坐)。その支配人である永田稔さんに、学生では感じることのできない長い時間の中での映画の移り変わりや、映画に対する想いを語っていただきました。

profile

永田 稔

1941年東京生まれ。中央大学法学部卒。卒業後大手私鉄会社に就職するも、文芸坐に転職。97年文芸坐閉館時は常務取締役。2000年新文芸坐オープンから支配人。

新文芸坐

1948年創立の人世坐をルーツとし、97年閉館した文芸坐の精神を引き継いで2000年にオープン。時宜を捉えた番組を企画し、良質な映画を数多く低料金で上映。映画監督や各界で活躍するクリエイターたちが通った名画座。



一名画座ならではの特集や上映作品を決める際に考えていらっしゃることはありますか?

古い作品っていうのは、今みたいにCGとか照明とか録音技術にしてもそういうものが揃っていないから技術的には今に比べとても難しい状況で作ったものが多いですね。それもあって、何を作るにしても本物を作らなきゃいけないという状況があったし、CGで処理するとかっていうことはできなかったんです。だから一つ一つが手作りだったんですよ。昔の映画と今の映画の違いはそこにあると思いますよ、技術的なところにね。昔の映画は表現にしても音響にしても小道具にしてもそれから美術にしても全部人の力。人がみんなそれぞれに知恵を出し合ってできた作品なんだよね。ワンカット撮るにしてもきちんと照明とか小道具にこだわっているし、今みたいにお金がないからって周りの背景をアップにしちゃうことはなかったから、そういう点では非常に評価が高い。それがあるからかな、昔の映画は見ていると人の温もりが感じられますよね。人間味みたいなね、温かさが。作者がいて監督がいて、それから俳優たちが想いを込めて演技したり演出したりしているわけだから、もちろん今の映画にもそれは伝わってくるんだけど、やはり全体的な雰囲気として、人の手で作っているものと最新の技術を使って作られたものとではちょっと差があるかなという感じはしますね。

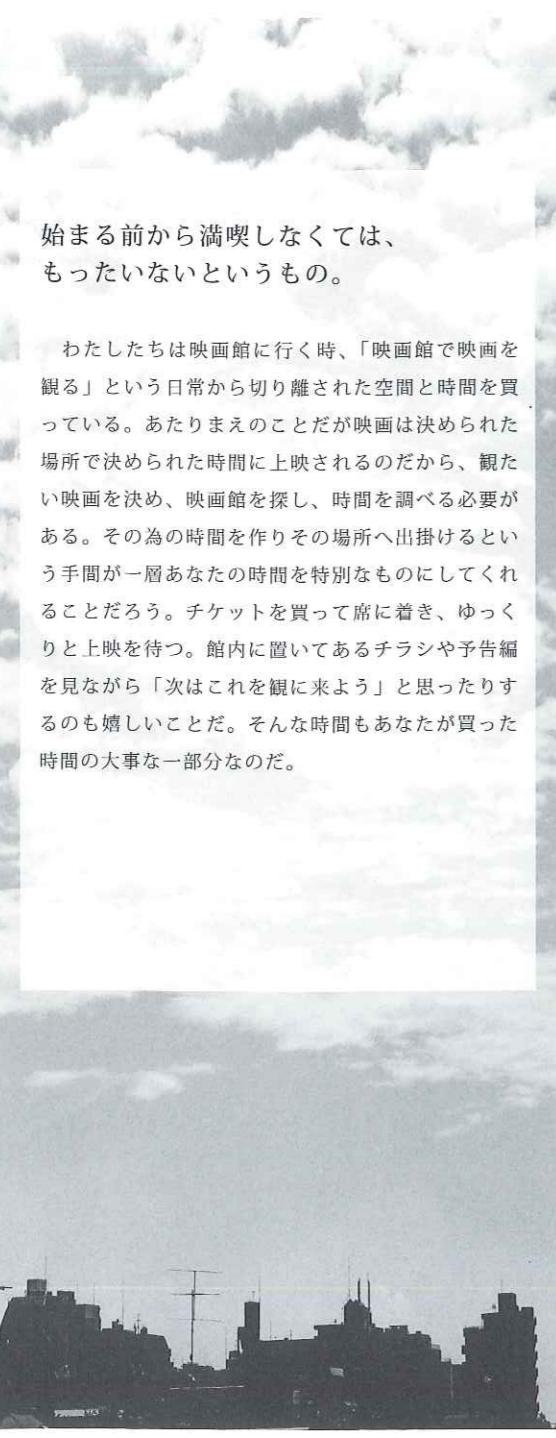
一映画館で上映する作品はたくさんの人に観てもらわなければいけないと思いますが、たくさんの人を引き付けるために必要なものは何かありますか?

変わってているところはあんまりないですね。でも、うちみたいに古い作品をやっているところは昔の昭和30年代の作品、いわゆる映画の全盛期の作品っていうのを若い人たちに見てもらいたいというのもあるけど、その映画の時代に生きた人々に観てもらいたいというのがあるわけですよ。それは、昔の作品を観て自分が生きた人生をもう一度振り返るということができて、お客様としてみれば非常に感慨深いものがあると思うからなんだよね。娯楽と言えば映画しかなかったからっていうのもあるけど、昔の人は映画館によく出入りしていたんです。だからそんな自分の青春時代に映画館で観たものを、今まで改めて映画館で観てもらいたいんだよね。今の若い人も映画はよく観てると思いますよ。でもテレビ画面でDVDを見たり、CS、BSで映画を見たりで、劇場で観てる量は昔に比べたら少ないとと思うんですよ。だから是非劇場に足を運んで観てもらいたい。

意識は大切なんじゃないかな。昔、文芸座を通してメジャーになった監督っていっぱいいるんですよ。例えば森田芳光監督とか、手塚眞監督とか、長崎俊一監督とかね。そういう人たちが仲間と作った自主映画を流す場所を探していて、文芸座には色々なお客さんがいらっしゃるから、そういう方々に彼らを紹介する意味を込めて上映することもあります。それで評価を貰ったことも。だから、今の若い人も作品を仲間やお客さんにどんどん見てもらうといいと思います。

一最後に、今映画を作っている学生に向けてメッセージをお願いします。

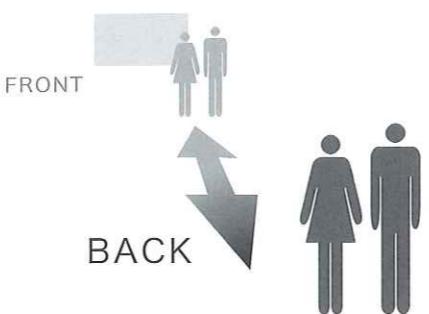
がんばってください(笑)。今の学生さんは映画を数多く観てもらいたい。もちろん新作もだし、古い作品も。観て学べることってたくさんあると思うからね。学校では教えてくれないこともたくさん学べるし。作品を見て、自分がいい作品だと思ったらそれを真似しながら学んでいけばいいし、悪い作品だと思ったら、ここはこうしたほうがいいなとか、自分だったらこうはしないなとか思うことが一つでもあれば、勉強になると思うんですよ。今活躍している監督さんでも、うちの名画座でいろいろな作品を見て映画監督になった人が何人かいいます。だから、とにかく色んな作品をたくさん観てください。最近は色々な技術が発達して製作もだいぶやり易くなったりと思うんですよ。だから学生さんはいっぱい作品を作って欲しい。過去の映画をたくさん観て、たくさん作って、試行錯誤してね。最初は真似だから。そこから自分の独自の画面とか構成とか編集を学んでいくわけだから。とにかく数多く観る、作る、そしてたくさん失敗して、どんどん捨てる。こだわることも大切だけど、まずはたくさん作ると見えてくるものがある。みんな苦労して画面を撮るよね。そうすると画面は大したことなくとも苦労したっていう事実が捨てなくなる。そうじゃなくてとにかく画面にいい物を残していくと。苦労しようが何しようがダメなものはダメ。どんどん捨てて体験していくんですよ。そうするといいものがでてくると思うんだよね。若い人は時間がいっぱいあるんだから、その時間を大いに使って観たり、実際に自分で作ったりしていいね。それに作ることには達成感もあるし、共同作業でつくりたい人は尚更、そのこと自体が非常に大切なことだと思うからね。そうやって楽しんで作ってほしいですね。



始まる前から満喫しなくては、もったいないというもの。

わたしたちは映画館に行く時、「映画館で映画を見る」という日常から切り離された空間と時間を買っている。あたりまえのことだが映画は決められた場所で決められた時間に上映されるのだから、観たい映画を決め、映画館を探し、時間を調べる必要がある。その為の時間を作りその場所へ出掛けるという手間が一層あなたの時間を特別なものにしてくれることだろう。チケットを買って席に着き、ゆっくりと上映を待つ。館内に置いてあるチラシや予告編を見ながら「次はこれを観に来よう」と思ったりするのも嬉しいことだ。そんな時間もあなたが買った時間の大半な部分なのだ。

あなたはどこに座りますか？



【前方の席を選ぶ場合】

映画館は、最前列中央の席とスクリーンの両端を結んだ角度が120度以内になるように作られている。人間の視野の広さは個人差もあるが左右に約100度。つまり、視野に負担がかからない程度であれば、前方の席も何ら問題は無いのである。

そしてなんと言っても、前方の席に座る最大の利点と言えば、とてつもない臨場感だろう。超大画面を至近距離から観ることだけで、相乗的に映画を楽しむことができる。また、後方に座る場合よりも他の観客の存在を意識しなくて済むことで、より映画との心理的距離も縮まるのである。

【後方の席を選ぶ場合】

後方の席に座ると、常に映像そのものはもちろんスクリーン全体を見渡すことが出来る。これにより、監督の世界観とも言うべき『風景としての映画』を思う存分堪能できる。また、後方の席は前方の席よりも高いところに位置するので、それによりわたしたちは映画を俯瞰することになる。結果としてわたしたちは映画に対して優位に立つことができ、映画に取り込まれすぎることなく、あくまで“映画鑑賞”というスタンスを保てるのではないか。人気のプライムシートと呼ばれる後方部の席を選ぶのはやはり合理的、ということか。

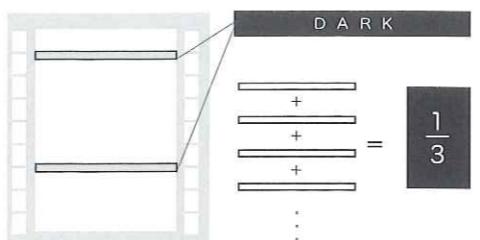
それぞれに利点はある。自分が最も作品に入り込める席はどこかを座り比べ、改めて探してみてはどうだろうか。

最近ではビデオで見る人も多いと思われる映画だが、映画館で観るのとでは何が違うのだろうか。
映画館で映画を観る、ということについて少し考えてみよう。

イマジネーションの素は3分の1の闇

映画の映写速度は毎秒24コマである。これは人間の残像の視覚特性から経験的に求められた。言い換れば、残像によって1コマ1コマが続いているように見える限界に近い値が一秒間に24コマ、ということである。

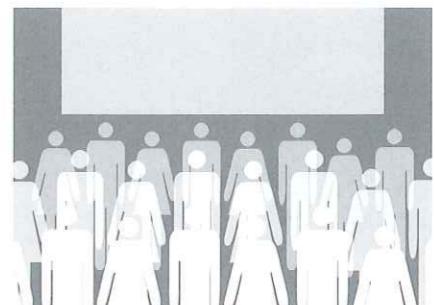
このフィルムの特性には驚くべき秘密がある。24コマに区切られたフィルムのひとつひとつのコマの間には真っ黒な部分が存在する。では、この真っ黒な部分に注目してみよう。これがコマの間に必ず存在するので、実はわたしたちは上映時間90~100分のうち3分の1は真っ黒な何も映っていない画面を観ている。この真っ黒な画面が度々目に入ることによって、わたしたちのイマジネーションは無意識のうちにかきたてられる。次はどんな場面だろう？と毎回心が不安と期待に翻弄されて、映画の世界へといつのまにか引き込まれていくのである。



暗闇の中、映画と対峙する

真っ暗な空間で映画を観ることによって、そこでは映画の画面だけが存在し、それ以外の全てのものが闇の中にいることで、眼は映像と一対一で向き合うことになる。映画のもたらす世界はそもそも非日常的な世界だが、暗闇の中では誰にも邪魔されずに映画に注意が向けられ、画面の誘導と対話によって、自分だけの世界が作り上げられる。そのようにしてどの人も映画館においては不要な情報を削ぎ落とされ、感覚的に自由になった状態で、映画そのものを味わうことができるのだ。

異空館、映画館



私たちが作品に浸るワケ

映画館は前述したように私たちを「日常から切り離すこと」で異空間へ連れて行ってくれる訳だが、もちろん観客をいかに映画の世界へとすんなり入り込ませるかが映画館の腕の見せ所である。スクリーンは日常的に目にすることに近い大きさで情景を映し、館内全体に響き渡る音響効果は自然な音に近い。劇場の暗闇は観客をスクリーンへ集中させると同時に、客観的な思考力を奪い作品に没入させる効果も生み出す。映画館は、フィクションである映画作品をいかにリアルに感じさせるかを追求した、極上の娯楽施設なのだ。

共有して初めて生まれる感動を、一緒に共有しよう。

映画館の醍醐味は、不特定多数の人たちと空間、そして感動を共有できるということである。同じ映画を、同じ場所で、同じ時間に観るということを選択した、それだけが彼らの共通である。見知らぬ人々と隣り合い席に着き、長いとは言えないかもしれないが短くもない時間を彼らと共にすることもまた映画館の非日常性を醸しだす種なのだろう。彼らと共有した時は、場所は、そして映画は、そのときだけのものになる。そのときだけのものをたくさん、たくさん見送ってきたのが、映画館という場所なのだ。

映画館は、いつでも観客を、日常からの迷い人を、一時の不思議な夢にいざなってくれることだろう。さあ、出掛けよう。異空館へ。

Go to the Movies!!!



映画人の映画の話



求められるのは、人間力

映画製作にとって必要なものとは？

映画製作は、チーム戦だから、基本的な「アイツ」から教えていく。それは、技術力、表現力だけでなく人間力を高めていかなければ映画を仕事にすることはできないよ。映画製作はチーム戦だからこそ面白さと楽しさがあるんだ。監督だけで作るものではなくてそこには撮影監督、美術、衣装、音響のそれぞれの想いが集まって作られるから大変だけど面白いんだろうね。

撮影映画監督とは

現在の映画人が育つ環境とは？

今は、昔の徒弟制度もなくなってる、養成は難しい環境になっていると思うね。例えばJSC（日本映画撮影監督協会）がやっている文化庁支援プログラムの『撮影助手育成塾』もあるけど、今は撮影所がなくなってしまってきている分、このような場を僕らが用意して、育ていかなければいけないと思う。

『撮影助手育成塾』にはどのような方が？

学生～30歳前後まで幅広い。ここは学校ではなく、現場で撮影監督の助手を育てる。そこで、本当にプロになるには、10年はかかるだろうね。でも、その助手でいる時間が本当に大切で、それはその期間にどれだけたくさんのこと学ぶことができるかということでもあるんだ。

撮影映画監督に求められる力とはどのようなものですか？

撮影映画監督は、ただ映画監督に言われた通り撮影すればいいわけじゃない。映画

「現場の声を聞きたい！届けたい！」第一線で活躍する映画人の想いや姿勢を、映画界を志す若者に向けて届ける。それがインタビューシリーズ『映画人の映画の話』です。映画制作をしたい、映画をプロデュースしたい、映画に出たい。そんな若者にとって映画人の学生時代や映画に対する想い、現場のお話は、刺激となり映画に対する考え方や関わり方を深めるきっかけになることでしょう。



Eiji Okuda 奥田瑛二 映画監督

Profile

俳優として活躍後、2001年『少女』を初監督。国際映画祭であるパリ映画祭などでグランプリに。第2作『るにん』は第7回the Method Fest映画祭にて最優秀作品賞を受賞。第3作目となる『長い散歩』は、今秋公開予定。



監督に「なぜ、このアングルなの？」と言わされた時に、その撮り方に自分の想いや意味がないと出来ないんだ。なぜこのアングルで撮りたいのか。そこに強烈な想いが持てないとダメだね。

映画館のスクリーンって凄く大きいよね？人間の視界ってそれよりずっと狭いんだよ。だから人間の小さな視界の中に、見せたいモノを見せるようにすることはとっても難しいわけ。そこをどうやって見せるようにするのか、というところまで考えるのが撮影する時に大切なことだと思う。時間の経過という制約がある映画の構図は写真とは少し違う。学生で映画を撮る人には、自分達の撮った作品をテレビで観るまでではなく、スクリーンで観たときのことまで考えて製作してもらいたいね。

過去の作品を掘り出すことで、今が見える

今日本映画界をどのように感じ、見ていらっしゃいますか？

かつては、オリジナルを失わせることなく映画として発展させた作品があった。例えば黒澤監督の『天国と地獄』（原作・エド・マクペイン）のように。いい作品には、映画独特のオリジナル性があった。でも今は、小説や漫画の原作があるのに迎合しすぎてしまっている傾向を感じる。CGが主流になつたらCGの作品ばかりになってしまっていたり、そういう方向に流れすぎている感がね。映画としてだからこそ面白いという作品が、もっともっとあっていい気がするよね。例えば好きな映画の黒澤監督の『七人の侍』はすごいんだ。アクティブラシ、泣かせるし、見せるところで見る映画らしい映画作品だよね。昔の人は本当にすごいんだよ。今思いついたアイデアで新しい作品ができると思っても、もうすでにそのアイデアの表現はとっくにあったりするんだよね。過去の作品をたくさん見て勉強しないと、はずかしいことになる。学生たちにも黒澤監督などの昔のいい作品がたくさんあるからそれを見て勉強していくね。

撮影映画監督に求められる力とはどのようなものですか？

撮影映画監督は、ただ映画監督に言われた通り撮影すればいいわけじゃない。映画

んあるからそれを見て欲しいね。

謙虚になれ。

映画監督を志す若者へのメッセージをお願いします。

いろんなことを勉強してほしい。撮影監督になりたいからって、カメラだけ分かっていればいいんじゃない。総合的に自分を高めていくことが、必要なんだ。一本撮ったからといってそこで満足してはいけない。人に自分の表現を伝えるということが大切なんだ。学生映画のうちは、自分の撮りたいように撮っていく。そうじゃなきゃ学生で撮る意味がないし、後になつたら自分がやりたいようにやっていたことが生きる時が必ず来るんだ。けど、そこで勘違いしていくては、プロとはいえない。プロになるには一度、自分がやってきたことを捨てる必要がある。そして、謙虚になって、自分の伝えたいことを伝えていくんだ。

Profile

日本映画撮影監督協会は、劇場用映画をはじめ、Vシネ、テレビ映画、文化短編、記録映画、PR、CM等を担当している撮影監督や、フィルム・ビデオテープ等を使用して撮影収録業務に従事している人達で構成している、我が国で公式に認可されている職能団体で、会員の社会的経済的地位の向上と優れた撮影技術の成果を目指して活動しています。また若手の撮影技術者を育てるため『撮影助手育成塾』を開講中。

憧れ 映画俳優をめざして

小学生の時にチャンバラ映画をよく見ていたけれど、その中でも『丹下左膳』という映画を見た時にすごい世界だと強烈な衝撃を受けたんだ。小学生が野球選手やパイロットになりたいと思い描くように、僕はあの大スクリーンに映っている丹下左膳役の銀幕のスターになりたいと思った。

あの丹下左膳になるにはその役をやっていた大友柳太郎にならなければいけない。そして大友柳太郎になるためには、映画俳優にならなければいけない。それが映画に対する最初の憧れだった。

諦めなかつた

フランス映画やアメリカ映画、日本映画にしても映画俳優はまず格好よくて大きくなければいけないと思ったけれど、僕は小学校でも中学校でも前から2、3番目のちびだった。

野球をやれば大きくなるんじゃないかなと思ってね。だから、中学では野球部に入った。そして、いずれ東京に出た時に飲まず食わずの大変な苦労を重ねるかもしれないから、体を鍛える意味でも高校ではまずボクシングをやることを考えたんだ。けれど俳優は顔が崩れちゃいけないと直して、スタミナや基礎体力をつけるためにラグビー部に入った。そしてその結果、身長は20cmも伸びたわけ。

そのあと東京に出てきたけれど、なかなか道が開けなくて。10年もの下積み生活の中で、それでも映画俳優になりたいという想いだけは消えなかった。それはやっぱり、少年の頃の夢と向上心、ラグビーで培った根性と持久力があったからだと思う。今まで映画俳優になって、その諦めなかつた姿勢一点だけは、自分を褒めてあげたいと思うね。

不真面目なところなんて一つもない

俳優になってからは、熊井啓さん（※1）や共演した三船敏郎さんなどから映画の基礎やマナーを学んだ。学ぶっていうことは、自分の財産になるんだよね。そんな財産が自分にはあるから、映画に対して真摯な気持ちで臨める。だから映画に関しては、不真面目なものは一つもない。普段の生活には不真面目なところはたくさんあるけどね（笑）。

※1 熊井啓：映画監督。社会的な問題提起をしながらも、美意識に優れた映像作家である。代表作『深い河』（1995）『日本の黒い夏 寂罪』（2002）

生涯、映画の世界で生きる

「映画俳優になりたい」という目的を達成し、映画という世界にひたっていた40歳の時に、ふと、とにかく映画の世界に居続けたいと思ったんだ。生涯、映画の世界に生き続ける。そのためにはどうしたらいいかと考えたとき、自ら映画を作ることに辿り着いた。映画監督になろう、とね。42歳の時には「撮るぞ」と準備していたけれど、なぜか急に映画監督になることが怖くなってしまった。怖くなったら失敗するだろうと。失敗したら、奥田瑛二という俳優も共倒れしてしまうかもしれないと思った。今まで積み上げてきたものさえもなくなってしまうのではないかと。

いくら映画俳優としてフィルムに出ていても、スタッフ側としての能力指数はまだ劣っているわけだから、そこでもう不安にならないようにするために、映画を一から徹底して学ぼうと思い立った。それからは、今まで映画俳優として培ってきたものを利用して映画を設計できるようになると、「映画とは何ぞや」というものを見つける

ために勉強していった。

そして6年後の48歳の時にやっと「よし！もういける！もう迷うことない」という状態になって、初監督作品『少女』を撮ったんだ。

学生に向けてのメッセージ

自分が「こうなりたい」と思った時、それと同時に今置かれている自分の状況や世界観をどう感じ取れるのかが重要だよね。ただ思っているだけなのか、それとも目的に向かって計画し、エネルギーに、アグレッシブに攻め込めるのか。それができた人は、売れる、売れないに関係なく輝いて見えてくる。

生きるという最大のアナログを自分でどのように管理するのかというの、志、精神力だよね。その中で、現実だけを見て生きていくのでは、何も掴み取れない。ただ明日を見ていても仕方がない。自分以外の誰にも見えない目的と夢からできている山に対する道筋を作り、旅に出ればいい。旅に出るために、自分のリュックサックの中に何を詰め込んだら一番効率よく登れるのかを考える。そして、自分の山を登り始めるとん。

映画とは、すべて許してくれるもの

人によっては、映画とは人生そのものというけれど、僕にとっての映画とはすべて許してもらえる存在なんだよね。映画に夢中になっていい作品を撮り続いていることこそが、僕にとっては全て許してもらえるものだと。これからもテーマのある作品を撮り続けていくよ。

Miwa Nishikawa
西川 美和
映画監督

Profile

1974年広島県生まれ。大学在学中には校舎と監督に見出されて、映画『ワンドフルライフ』にフリーのスタッフとして参加する。02年に『蛇イチゴ』でオリジナル脚本・監督デビューし、数々の国内映画賞の新人賞を獲得した。05年には、監督5名の競作によるオムニバス『female』にて「女神のかかと」を発表。06年秋にはオムニバス映画『ユメナ夜』(原作・夏目漱石)が公開予定。『ゆれる』は4年ぶりの完全オリジナル長篇映画となる。



デビュー作の『蛇イチゴ』、今年のカンヌ映画祭監督週間部門に出品された最新作の『ゆれる』と共に、脚本家として、また監督として映画に携わる西川美和監督にお話を伺いました。

学生の頃のお話を聞かせてください

私はすごく不精な学生時代を送っていたんですよ。当時は、いろんな意味で一番ダメな時期でした。年齢的にもひねくれていたし、みんなで結託してなにかやろうってことに対して、まっすぐな感じになれなくてね。だから一人でできるものをやりたいと、映画じゃなくて写真を撮っていたんです。これなら映画づくりほどお金がかからないし、一人で現像からプリントまで出来ますから。写真で生活することもぼんやり考えましたが、もともと文章を書く仕事につきたいと思っていたので、写真という言葉をもたない表現が、自分はどうしても窮屈に感じてしまったようです。それで結局ずっと好きだった映画に行き着くんですけど。でも自主制作もやっていなかった私が映画の世界に入っていくなんて、周囲の人は、リアリティを感じなかつてしまふね。

最近は西川監督のように脚本から監督まで一貫して映画に携わる方が少なくなっていますが、この日本映画界の現状をどう思われますか？

私が映画界に入った当時は、北野武監督や黒沢清監督、青山貞治監督といった方々がどんどんインディペンデントで作っていましたが、私がついたのも是枝裕和監督で、みんな自分のオリジナルを監督するというのが普通のスタンスだと思っていましたが、ここ5年くらいで随分変わりましたよね。いろんなスタイルがあつていいと思うので一概に批判はできませんが、TV局が製作するテレビ的な映画も増えてますよね。そして、そこには実際たくさんのお客さんが入っている事実を、誰も否定できないと思

うんです。実際に10年くらい前よりも、日本映画を観る習慣はつき始めただろうと思いますし。ちょっと前まではマニアとかしか行かない雰囲気だったのが観客の感覚も変わって、いろんな映画を観にいこうっていうきっかけになったのだと思います。だからこそ作品も多様であることが必要なんですね。明快なエンターテイメントもあっていいし、作家主義的なものもあってほしい。それを観る側も許容できないといけないと思うし。

もちろん私も一人の観客として、自分好みの映画だけじゃなく、いろんなものを許容できるように成長していくたいと思っています。きっと「これしかだめ」みたいな発想から、物事は貧しくなっていくのだと思うし、そういう意味で自分のポジションは守っていきたいと思います。でもいわゆる世間は主流に乗せたがるし、観客もそれに飲み込まれがちですよね。現在の私はまたまたオリジナルな方法論で、たまたま私に賛同してくれるプロデューサーに恵まれて、ここまで2本は撮させてもらっているんですが、このスタンスを許してくれる人たちがいる限りは自分のオリジナルを貫きたいと思いますね。

学生に向けてのメッセージ

現場に人が足りない、とはよく言われていることです。そのわりに映画の世界は入り口が分かりづらい。私も実際そうでした。こんな状況ですが、私がまず一番に思うのは、映画を志す時に自分のビジョンを具体的にしっかりと持つこと、ですね。

結局映画作りも細分化された世界だから、その中でどのポジションをとるか、ある程度想像して入らないと、面食らうことがある。入り口のきっかけは何でもいいと思うんですよ。例えば、プロデューサーになりたくても、最初は照明助手でも美術助手でも映画作りの色々なことは現場から習うことは

多いですから。けれど、将来的なビジョンがはっきりしてないと、こちらも人手が足りない分いいように使いますからね。結局自分が映画の何をどうしたかったのかよく分からなままに、気づけば何十年も助手のまま過ぎている、ということにもなるかもしれません。

今は10年くらい前よりも、映画作りに対して学校の体制も整ってきていたみたいなので、授業でも多くを学ぶことができると思います。だから、ビジョンをしっかりと持ってたくさん的人が映画作りに入ってきてもらいたい。そのビジョンを掴むためにも、まずは映画を出来るだけ「作り手」の視点を意識しながらじっくり観てみること。私はそうしながらいくつの尊敬する作品に出会うことが出来たので、それらが目標にもなって、前に進んで来れたのだと思います。自分が尊敬してきたものの跡をたどっているんだ、という自負がやっぱり根本を支えてくれているのです。でもその反面、映画製作現場にいると、貧しさやら孤独に負け、何だか自分が世間の日陰者みたいな感じがしてくることもあります。職業として成立していないというか…。実際そうなんですけど(笑)。映画なんか撮っていたって、最終的には野垂れ死にかもと感じてしまう。でも少しずつでもそういうシステムを変えいかないと、さらに自分たちの後が続かないと思います。だから頭のいい学生さんがどんどん入ってきて、システムをなんとか変えてください(笑)。闇雲に入ってくるとしんどいだけになってしまいますが、まだまだ映画業界を見捨てないでくださいって言いたいです。(笑)

Yoshimitsu Morita
森田 芳光
映画監督

学生時代から8ミリ自主映画を撮り始め、「の・ようなもの」にて劇場映画デビュー。後に、「失楽園」『阿修羅のどく』『間宮兄弟』などあらゆるジャンルの作品を生み出す森田監督に、ご自身の学生時代、監督の視点、学生に対する想いまでお話を伺いました。

学生時代

大学在学中から映画に携わることを志していましたか？

僕はもともと放送学科でしたから、本当は映画ではなくて、放送関係の会社に勤めたいと思っていました。高校の頃も、映画というよりも、ラジオのディスクジョッキーのような音楽を掛けながらその間を繋ぐものを自分で作っていましたから。なので、8ミリ映画との出会いは、全共闘で学校がロックアウトされてしまったことからで、映画監督になろうと思ったのは、それから随分と経ってからでした。

どのような作品を撮っていましたか？

学生の頃撮っていたものは、ほとんど人が出でないような音と映像を合わせた実験映画でした。それを自主映画専用の小さな映画館で上映してもらったり、自分で公会堂を借りて上映していました。でもお客様が余り入らなかったので、当時はとても辛かったのを覚えています。20代の頃はほとんど劇場でアルバイトをしていました。当時は、将来の希望もなくて、結構辛かったんですが、その頃も映画製作をしていましたので、作品が出来るごとに自信が付いていました。でも、あの頃は自分が映画監督になれるなんて全く思ってもいませんでした。

影響を受けた監督は？

日本映画だと大島渚監督、今村昌平監督、同時代ではないけど黒澤明監督、小津安二郎監督です。外国映画だとアントニオーニやゴダール、フェリーニとかどちらかというと、芸術映画が好きでした。今だと、スピルバーグ監督の作品は絶対観ますね。アメリカの場合は、マーケットが大きいから、一本成功すると安泰なので、なかなか5本以上名作がある監督はいないんですけど、スピルバーグ監督の場合は5本以上も名作がある。本当に素晴らしい監督だなと思っています。

自分が映画監督になれたのは、学生時代にたくさんの映画を観ていたからだと思います。あの頃は普段の生活の中から、新しい刺激や考えを求めてよく映画館に行っていました。映画からいろんなことを学べま

すし、映画は多くの人と出会う場だと思っているので。

僕は、本当にいろんな部分で映画から影響を受けてきましたから、今度は自分が返さなければいけないと思っています。『間宮兄弟』では若い人たちが「ああこういう作り方もあるんだ。」って思ってもらえるように意識して作りました。今、堤幸彦監督や中島哲也監督が話題になっていますが、僕が「バカヤロー！」シリーズで生み出して、今彼らが活躍していることは、本当に嬉しいです。自分のライバルになりますからね。ライバルは強い相手である方がずっと面白いです(笑)。

森田監督×人

現在の森田監督の作品からは、「人間味」というものを感じますが、その変化のきっかけというのは？

「人間を描くこと」それが僕の特徴になると思ったからです。僕の映画の特徴というのは、人間を細かく見ていることです。例えば『間宮兄弟』だと、なんでこの人物はこの洋服を着るのか、この本を読むのか、親がどんな人なのかという背景を徹底して考えます。また、あの頃、実験映画を撮っていた経験は、今でも生きていると感じます。当時は自分で撮影や編集もやっていたので、どういう風にカメラのフレームを切り取って、照明を当てて、音を入れると、人間の生き方が描けるか技術的な面でも分かるからです。なので、人を撮っていない実験映画をやっていたけれど、その技術的なものが蓄積されて今の人間を描きだすことに生かされています。

学生は、他の人がやらないようなバイトをすることも面白いと思います。面白いバイトをやって、それを元に克明にシナリオにできたりすると、また新しい作品ができるんじゃないかな。あと街の中にも映画の題材になるようなものがいっぱいあると思いますよ。例えば、街で人の流れをカウンターで数えている人の視点から見える街の流れとか、人の動きとかね。

『間宮兄弟』を観れば、自分も作れるかなって思うんじゃないかな。あの作品からは、ハブニングのない小さな話でも映画になるんだって思ってくれればいいと思うんです。人間を細かく丁寧に描いていることで、観ている方に喜んでいただけているようです。だから恋愛とかスポーツとか、そういう大きなジャンルに囚われすぎずに、もっと細かいところで人を見ていったほうが、いい映画が撮れると思います。なので、映画に対する興味だけではなく、自分が普段どんなことに興味を持っているのかを感じ、そこから、自分の中に他の人にはないものを、貯めていって欲しいですね。

また、学生で映画を撮って、すぐ映画監

督になるというのは大変だと思いますから、色々な仕事をやってみるのもいいと思います。例えば中島哲也君のようにCMをやってから映画を撮るみたいに、自分で何か職業をもって、そこから学んだことを映画に反映させるのもいいと思います。いくなりたくて、才能がないとダメだし、そこはかなりシビアな世界なので。

監督の思う映画の素晴らしさとは？

人と出会えることだと思います。人間は一生の内に出会える人は、たかが知れてますよね。でもそれが映画だったら、王様だったり、軍隊の人だったりと、現代では出会えないような昔の人に出会えたり、逆に未来の人に出会えたり、映画の中にはたくさんのお会いがあると思うんです。そして、僕らにたくさんのこと教えてくれますからね。それは映画ならではだし、すごく素晴らしいことだと思います。

学生に向けてのメッセージ

絶対人に負けないような自分の視点を持つて欲しいです。なにか人より秀でたものが、一つでもあればそこから映画は生まれてくると思います。あと、学生だからこそできることをやって欲しいと思います。例えば、学生映画だったら、スポンサーとかは関係ないと思うので、田中康夫さんの著作の「なんとなく、クリスタル」みたいに、岡有名詞がたくさん出てくるような映画を観てみたいと思います。そういうことを学生時代にやっておくことが後々活きてくると思いますからね。

Profile

学生時代から映画を撮り始め、1981年『の・ようなもの』で劇場映画デビュー。「家族ゲーム」では多数の映画賞を獲得した。他「(ハル)」、「失楽園」、「横徹犯」など代表作品多数。最新作は『間宮兄弟』。



Chihiro Kamayama
亀山 千広
フジテレビジョン映画事業局長

3cm、30cm、3m、30m の メディアコミュニケーション

フジテレビでは昨年度の邦画収入約30%を占めているということですが、実際にこれから日本の映画はどのようにしていくと亀山さんはお考えですか？

大学在学中から映画製作に携わり、フジテレビジョン入社後ドラマ製作の現場から映画事業局へ。「踊る大捜査線」のメガヒットから『プレイブースター』まで多くの話題作を世に生み出すフジテレビジョン映画事業局長・亀山千広さんによる自身の学生時代について、映画製作の過程から学生に対して求められるものまで様々なお話を伺いました。

学生時代

映画に触れるきっかけは？

両親が映画好きで、小学生の頃から母親とよく映画館へ行っていました。その頃は映画というよりも映画館という小屋の雰囲気が大好きで、予告編をワンカットもテレビスポットで流していないような、情報を取ろうと思つても情報を取れない時代でしたから、映画館に入ると「さあ、これから一体何を見てくれるんだ？」って本当にワクワクして。中学3年生ぐらゐの時に将来の職業選択に“映画”という職業があるんだと認識し始めました。

大学在学中から映画製作に携わっていたということですが。

今は昔よりも映画について勉強する機会や場所は随分増えたと思いますが、僕らの頃はそういう機会や場所がありませんでした。ならば現場で学ぼうと思い、五所平之助監督の書生になりました。板前と一緒に、料理を学ぶよりも調理場に入つて体で覚えるように映画製作も徒弟制度の中で、体で覚える技の一つだと思っていましたから。

“記録”ではなく“記憶”として残す

数々の作品を手がける中で企画がひらめくきっかけというの？

自分の中にあるいくつかの引き出しの中でいろいろ組み合わせをしながら生まれてくるものだと思います。だから映画や映像を作り出すことを去ることながら、「まず観ろ！」と学生には言いたいですね。社会人になるとほとんど自分の時間がなくなるから「今から映画をたくさん観ておきます」と言つても実際は寝る時間はないほどだから、映画館に行く時間は取れない。だから学生時代に一本でも多く映画を見る事が出来るかが大切だと思います。

僕が学生時代に名画座を巡つて年間400本見た作品は、今でも自分の“記憶”として残っていますが、“記憶”は、“記録”ではないで間違っている場合があります。例えば、「あの作品はラストシーンが良かったんだよね。」と自分の“記憶”的に強烈に残っているシーンで話しているのに、どうも話が食い違う。「それすごく面白いストーリーだけど全然違うよ」と言われた時には、自分の勘違いの中からオリジナルストーリーが出来上がっていることに気づきますよね。たくさん見て、しかもそれを“記録”するのではなく“記憶”で留めておくことで、オリジナルが育まれているんだと思います。僕の記憶力は、特別なものではないけれど自分の中にある記憶でとても助かっています。

るわけね。」とこち側の筋を理解したら、もう一度劇場に行こうかなとなる。

映画を映像というものの考え方ではなく、一つのイベントと意識して、プロジェクトとしてやらなければいけないと思います。つまり映画館に行くことも、ディズニーランドに行くことと同じだという風にしなければ、映画館は行かない場所になってしまいます。今はもう映画館に行かなくても3ヶ月経てばDVDが発売されるし、自分の家がでかいシアターになるわけですからね。

自分が映画もテレビも経験して考えることは、観客とメディアとの距離感で生まれる“3cm、30cm、3m、30mのメディアコミュニケーション”です。3cmは1対1のコミュニケーションで一番身近なものである携帯です。30cmは活字やパソコン。活字は興味があれば調べて、パソコンならサーフィンして目的の情報に当たることが出来て、そこで得られた情報を他の人に渡すことが出来たりする非常に能動的に情報を得られるもの。3mは、今僕たちがいるテレビ。これは圧倒的な情報量を本人が気づいている、いないに関係なく出している。30mが映画やイベント。圧倒的な物量でスポット情報やタイトルを認知させる。30mでおもしろそうだなと思わせて、30cmで調べて、劇場の予告編やメイキング、予告CMなどネットのコンテンツを充実させて、帰っていく。おもしろそうだなと思って、「一緒に行こうよ」と周りを誘わせることを一連のメディアの流れで考えていかないとダメですね。

学生に向けてのメッセージ

学生時代に映画をいっぱい見ておいて欲しい。昔の作品はもうビデオで見るしかないけれど、やっぱり劇場に行って距離感を味わわないとだめだからね。

テレビだと、録画したVTRでドラマを観すに、リアルタイムで観て、次の日、どういう反応があつて、どんな話をするのか、そういう観てている環境のところまでを理解して欲しい。製作で言えば、お茶の間にあるテレビは、観てている画面以外の物も同時に視野に入つてくることを、線を切り取る段階で考える。例えばテレビだと、他の物も一緒にに入った時、それよりも画面を目立たせるためにアップは当然大きくなるけれど、映画だと他是真っ暗で画面しか視野に入らないから、アップを大きくする必要はないというように。ストーリーを作ること以外にも、そうやって観ている人の環境を考えることを、学生のうちから意識して努力して欲しいですね。



Profile

大学在学中に、映画監督・五所平之助の書生を務め、映画製作を経験する。1980年フジテレビ入社後、攝影部および第一制作部へ。現在はフジテレビ映画事業局長として、『踊る大捜査線 THE MOVIE』シリーズはもちろん、数多くのヒット作品の製作を手がけている。

Minami Ichikawa
市川 南
東宝 映画調整部部長

の選定といったパッケージを整える仕事がプロデューサーの仕事です。撮影が終わったら、映画が公開されるまでの宣伝期間を含めて、プロデューサーが作品をまた動かしていきます。

では、企画・脚本段階から監督の色が出る作家主義的な作品から、原作がある作品がヒットする傾向が強い最近の日本映画を市川さんはどのように見ていらっしゃいますか？

ヒットはケースバイケースだと思います。最近でも『THE 有頂天ホテル』のようにある意味完全に作家主義的な作品でも、それが当たる場合もありますから。しかし、プロデューサー主導の映画が増えてきて、今の日本映画の興行が良くなっているというのも、事実だと思います。

昭和33年は、映画人口11億2700人と一番映画人口が多かった時です。一人あたり10回近く見ていた計算になります。去年は、1億6000人ですから、当時は今の10倍近くの人が見ていたことになりますね。昭和30年代の映画全盛期を過ぎて70年代、80年代は、監督や脚本家が思いを込めた作家主義的な映画が評価される時代でしたが、その頃の日本映画の元気は無くなっていました。映画は、商品の面もあれば、映画評論という分野が成り立つということもあり、芸術の侧面もあります。そのため作家主義的な作品ばかりではなく、商業的な映画も作らなければいけないので、極端に言ふと、作家主義的に作った作品を宣伝やパッケージを派手にして売り飛ばすといった作品も当時は多くありました。そのことが、観客が映画から離れていました。映画祭で入賞して、ステップを踏む方もいるだろうし。そのため、監督や脚本家、クリエイターに行く道が無数に増えたからこそ、自分は何をやりたいのかというのを見極めてどのルートでアプローチすれば近道のかを考えて行動したらいいのかなと思います。これをやり遂げたいとする信念はとっても大切ですが、それは目指す人誰もが持っているのですから、どういうアプローチの仕方が目的に近道なのかという選択肢を間違えないようにして是非頑張って欲しいです。

しかしどんだんと日本映画を作っている人の意識が変わっていき、映画は、芸術だとする出発点ではなく、観客に楽しんでもらう、エンターテイメントとしての映画をみんなが心がけるようになりました。どんな観客に見せたいかで題材やキャスト、監督、主題歌を決めるように、観客から逆算して作品を生み出すという他の業界では当たり前に行われていた事が、映画界でも明確に行われるようにしました。今まででは、映画イコール芸術だとする側面が邪魔していたんでしょうね。作家の思いが強すぎる映画が主流だったのが、ようやく変わってきた。

しかし日本映画が変わってきた今、かたやハリウッド映画は、続編や大仕掛けなもの、リメイク作品ばかりで、少し飽きられてしまっています。そんな理由もあって、観客の目が日本映画に向かうことになったのでしょうか。あるいはまた、テレビドラマ若者が見なくなっている時期にも重なっています。しかし、人間といふのはドラマのある娯楽を見たいというのがあるので、若い人たちもどんどん映画館に戻ってきたというのが、近年の特徴だと思います。

影響を受けた作品や思い出深い作品というのはありますか？

邦画も洋画もあらゆるジャンルの作品を観ていました。僕が大学に入るぐらいまでは、レンタルビデオというのはほとんどなかったので、昔の作品をあまり観ることができませんでしたが、それでも、テレビで深夜に放映されていたのを、録画して観たり、名画座に観に行つたりしていました。昔の映画ファンは映画館から映画館へとはしごして行くんですね。結構大変だったので、観ようと思ったらDVDですぐに観ることの出来る今の環境は幸せなんじゃないかと思います。でも、どんなにホームシアターが発達したとしても、映画館が無くなることはないと言ふ人はいます。暗闇の中で、一つの感動を多くの人と共有するというのは、家では得られない体験ですよね。だからどんなに家庭

料理でおいしいものが食べられたとしても、レストランに行くように、イベント感というのが映画にはあるんだと思います。

学生に向けてのメッセージ

実は、僕も8ミリ映画を作っていました。中学2年生の時に買ってもらつて。

それは、スピルバーグが8ミリカメラを手にしたのと同じ年齢で、スピルバーグはその年でUFOが出てくる大作を作っていたんですが（笑）。僕は大学卒業するまでやっていたんで、みなさんの仲間のような感じではないでしょうか。監督や脚本家というようなクリエイターになることは、どこか向いていないのではないかと感じていました。僕の場合は企業に属して映画の仕事をした方がいいと思ったので就職活動を行いました。

あらゆるものに犠牲にしてもいい作品を作るんだとするタイプの人のが残っているのではないか。もちろんこれは、断定することは出来ませんが。最近では、岩井俊二監督のようにテレビやCMなど異業種的な入り方で映画監督になる人も多くいます。以前は、現場に行きたい人は、映画会社の撮影場所から入社して、徒弟のように積み上げて3rd助監督2nd助監督とステップを踏んで映画監督になっていました。今はそのような垣根もなく、岩井監督のように助監督をせずに監督になられる方もいらっしゃいます。あるいは、フリーのスタッフとして監督の助手についてやる方もいらっしゃいます。映画祭で入賞して、ステップを踏む方もいるだろうし。そのため、監督や脚本家、クリエイターに行く道が無数に増えたからこそ、自分は何をやりたいのかというのを見極めてどのルートでアプローチすれば近道のかを考えて行動したらいいのかなと思います。これをやり遂げたいとする信念はとっても大切ですが、それは目指す人誰もが持っているのですから、どういうアプローチの仕方が目的に近道なのかという選択肢を間違えないようにして是非頑張って欲しいです。



Profile

1989年東宝入社。宣伝部に所属し、宣伝プロデューサーとして『千と千尋の神隠し』『ラヂオの時間』『学校の怪談』シリーズ等、約30作品を担当。現在は映画調整部長として配給作品の攝成、自社作品の企画に携わり、『世界の中心で、愛をさけぶ』『いま、会いにゆきます』『電車男』などの作品をプロデュース。



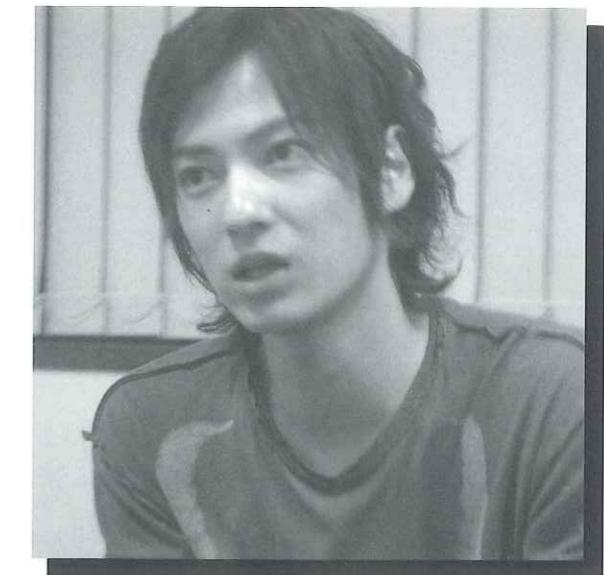
Profile

1976年茨城県生まれ。映画・TVドラマ・舞台など多方面で活躍。97年の大森一樹監督『ドリーム・スター・ジアム』で映画デビュー。『カリスマ』(00)や『スペーストラベラーズ』(00)など話題作に出演するかたわら、NHK大河ドラマ『新選組!』(04)『人間の証明』(04)『がんばっていきましょい』(05)などの人気テレビドラマで注目を浴びる。代表作に『チキン・ハート』(02)『ロックンロールミシン』(02)『瞳う伊右衛門』(04)『樹の海』(03)『全身と小指』(04)など。自身が初監督を務めた『13の月』が9月30日よりシネマート六本木で公開予定。
<http://www.lespros.co.jp/>
<http://lespros.jp/>



Profile

1999年TBS系ドラマ「天国に一番近い男」で俳優デビュー。『リリイ・シュシュのすべて』『青い春』『バトル・ロワイアルII 鎮魂歌』など話題作に相次いで出演。映画、ドラマ、CMと多方面で活躍。9月2日より映画『アキハバラ@DEEP』が公開。



モノ作りの心地よさ

学生の頃から俳優を目指していましたか？

演じるということに興味はなかったので、俳優になりたいとは思っていませんでした。中学では比較的大人しい方で、高校になってからみんなの前で自分を出したいという気持ちがだんだんと生まれてきて、人前に出ることが比較的好きになって、自立ちながら屋にならったんだと思います。高校を卒業して、建築に興味があったから設計とかをやりたくて、建築の専門学校に行きました。その頃ぐらいからモデルの仕事をし始めましたね。学校を卒業する頃には、就職という道も考えたけれど、映画に初めて携わったことで、モノ作りの心地よさっていうのに惹かれて、そこから俳優を本格的に始めました。今になって、建築のことについてもっともっと勉強しておけばよかったなと思っています（笑）。

役の人間を生きる

俳優をやっていくんだという気持ちになった作品というのは？

主役をした『BLUES HARP』の作品からです。それまでは、撮影現場に行って、ただ演じるというだけだった。でもこの作品では、自分が主役ということもあって、仕事に対する責任感が生まれたし、役作りをする過程に楽しさを感じることができました。役作りをする過程が、役の人間を生きていくことだと感じられました。

映画の醍醐味

映画の面白さとは？

何度も回すことが出来ないフィルムを使う映画は、現場に緊張感が生まれたり、作品に重みが出てくるように感じる。そこから微妙なニュアンスを表現することができるし、それが映画の面白いところじゃないかな。映画の撮影の方がテレビよりも時間かかるし要求されることも多くて、体力的に精神的にもきつくて大変だけど、完成したときの喜びはその分本当に大きい。そういう喜びや、作品を見てくれた観客が、その作品のメッセージをどういう風に受け止めてくれて、どう考えてくれるかを感じることができる瞬間っていうのが映画の醍醐味かなと思うし、俳優をやる上での魅力にもなるのかなと思います。

初監督

映画を撮ることになったきっかけは？

元々、旅行に行った時にビデオをまわし、編集や音入れなどをしていた、興味はありました。初めて撮った『13の月』での撮影期間は、俳優の時よりも増える仕事量や考えなければならないことに本当にいっぱいいましたが、その分楽しみも多かったです。

初監督作品のテーマはどのように決めましたか？

どんなテーマにしようかと考えた時に当時恋愛をしていたこともあって、好きな人に対する気持ちや恋愛を感じる素直な想いを映画で表現したいなと感じて、恋愛をテーマに

決めました。月や太陽や宇宙など、ミステリーストーリーに感じられるものが好きなこととか、古代使われていた1年を13に分ける暦を自分のルート（起源）として、テーマである恋愛と絡めてスピリチュアルラブストーリーに仕上げました。恋愛の要素を生かしながら、13の暦の要素を入れるっていうことは本当に難しくて、内容はもっと絞らなければいけないと感じましたね。次やるとしたら、もっとスピリチュアルラブストーリーを追求したいですね。

監督になって見えたことは？

監督、俳優っていう立場を考えると、どちらの立場でも作品に対しては無我夢中だし、メッセージを観客に伝えようとする想いの部分では一緒だけど、俳優の時には役の中しか見えてこなかつた作品の持つメッセージが、監督になると作品全体で見ることができます。だからこそ、これからも監督としてもっとやっていきたいですね。

学生に向けてのメッセージ

自分が良いと思うモノ、ダメだなと思うモノでも、胸を張って人に伝えることが大切だと思います。めげずに頑張っていって欲しいです。

映画『リリイ・シュシュのすべて』で注目を集め、その後も『バトル・ロワイアルII 鎮魂歌』『アニムスマニア』等数多くの映画やドラマ、CMに出演し、若手俳優の中でも注目を集めている忍成修吾さんに俳優として、また映画に対する思いを伺いました。

俳優になられたきっかけは？

僕は俳優を目指していたわけではなかったんですが、知り合いの方の紹介で事務所に入りました。初めて現場に入った頃は、よくわからないまま「どうして俺がここにいるんだろう」と思っていました。でも、そのうち映画の現場には、すごく個的な人達が多くておもしろいなって感じるようになり、現場で同年代の子たちと話をしていると、みんなすごく夢があることが分かって素敵だなって思ったりして、いろんな人と出会い、いろんな役者になるんだと強く思うようになりました。

繊細な役が多い印象がありますが。

本来の自分はそんなにナイーブではないんですけど（笑）、繊細な役を演じるにあたって、表の部分だけでは表現できないと感じているので、セリフや設定の人間らしさを出すために、楽しい顔をしているけれど哀しい部分もちゃんと持っている。そういうことを意識して演じたいと思っています。

映画とドラマの違いは？

映画と舞台ほど違います。映画はすでに脚本が出来上がっているので100%で全力投球することができるけれど、ドラマは一話ごとだからラストが見えてこなったりするし。先輩役者さんと話していて自分自身も思うのは、

現場から生まれた作品を観ると「あーみんなで作りあげたんだ」と思いましたし、作品に携わることが出来た自分を誇りに思いました。そういう経験があつて俳優としてさらに頑張ろうと思いました。

俳優としての意識の変化は？

仕事として演じている部分もあるけれど、いい意味で遊んで演じることが出来る気持ちも芽生えてきて、すごく楽しいですね。あとは役に対する思い入れというのが出てきました。今まで、与えられた役を言われた通りにしか演じることが出来なかったのが、段々と自分で「こういう風にしてみたい」という“我”が出てきたりして。他の出演者の方が演じる役とどう絡めていくか、作品の全体を観てどういう風に動けばよくなるかっていうのをだんだんと意識して考えるようになりました。

映画よりもテレビドラマの方が、技術が必要なんじゃないかと思いますね。ドラマの方がカメラも多いし、ここでこうやってこうしてって決められた枠の中で自分の役を表現しなければならないからそこが難しく感じます。新人の頃はそれだけでいっぱいになってセリフが飛んでしまったりすることがよくありました。

俳優としてこれからこういう役を演じたいというのありますか？

昔は影のある役や、多重人格者を演じてみたいっていうのはありましたが、いろんな役を演じれば演じるほどやりたいと思う役は無くなっていました。逆に同じような役でも違うように演じてみたいと思う役でも違う役をどうやってみたいか、作品の全体を観てどういう風に動けばよくなるかっていうのをだんだんと意識して考えるようになりました。「こんな役きたんだ！」と思うような役をやりたいという気持ちが今は強くありますね。

学生に向けてのメッセージ

早くいろんな現場に入っていただいて、一つでも多くの作品に携わって、是非一緒にいい映画をつくりましょう。



Hideo Sakaki

柳 英雄

俳優・監督

特集
3

映画人の映画の話

Special

1995年、映画『この窓は君のもの』で俳優デビュー後、自主映画『"R" unch Time』を製作し、その作品を通して俳優としての道も切り開いてきた柳英雄さんに、俳優・自主映画製作へのきっかけ、そして若者に対する思いまでお話を伺いました。

映画は人の繋がり

俳優になられたきっかけを教えてください。

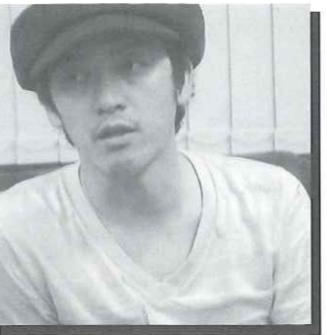
長崎から上京して、情報誌を見た時に、たまたま映画の主演募集の記事があって、それに応募して受けたのが俳優としての始まりでした。その作品に出演してからは、仕事がなくなり「このままじゃやばい。」と思った時には、自分で売り込みをしていました。飛び込みで監督や映画関係者に会いに行ったり、書類を置いてきたり。そうすると、さっき渡したはずのものがゴミ箱に捨てられていることなんてショッちゅうありました。悔しくてたまらなかつたですね。その頃、俳優のハーヴェイ・カイルが雑誌『PLAY BOY』のインタビュー記事※1で、若い全世界の映画人に対するアドバイスに「死ぬな！絶望するんじゃない。生き延びるんだ！」と言っているのを読んだ瞬間、立ち震いして泣いてしまいました。なぜなら、その言葉はその人が下積みを経験しているからこそ言える言葉だと感じて。ハーヴェイ・カイルは僕にとって神様です。あの人の一言で本当に救われました。

※ 1 ハリウッド・スターインタビュー記事特集「ハリウッド・ガイズ・スーパーインタビューブック」掲載。

自主映画を撮り始めたのは、飲み会の席で友達の女優が、グズグズしている自分に向かって「じゃあ、自分で撮ってみなよ！」と強く言ったのに対して「おお！撮ってやるよ！」と半ば意地になって言ったことがきっかけでした。そのときにお金もなくて友達に協力してもらって無我夢中で撮った作品『"R" unch Time』が、あるフェスティバルで入選を果たし、絶望していた俳優の道に光を差してくれました。そこで、僕が俳優もやってることを知った北村龍平監督に出会い、彼の作品である『VERSUS』に出演することになったんです。やっぱり、想いはぶつけてみたい

Profile

1995年、映画『この窓は君のもの』でデビュー。その後2001年、ゆうばり国際音楽祭ファンタスティック映画祭にも出品された映画『VERSUS・ヴァーサス』(北村龍平監督)で主演。翌年にも『ALIVE』(同監督)で主演を務め、その野性味あふれる演技でますます注目を集め。俳優のほかにも『終着駅の次の駅』で監督も務めている。今後は、映画『蟲師』『地獄でたったふたり』『親父』『MANUAL』の作品が公開予定。



とわからないし、映画は人の繋がりであると感じています。自分からどんどんぶつかって出会いわなければ何も始まりませんからね。

徒弟制度もなくなり、監督になるためにはどうしたらいいのかわからないと言う声も聞きますが、柳さんはどのように感じますか？

だからこそ“自分の言葉”を持って欲しいですね。

学生に向けてのメッセージ

学生という気分は投げ捨て、学生という立場に甘えることのない力強い映画を制作して欲しいと願っています。そして、もう一度アナログ的な基本的部分を学んで欲しい。

狭い視野の中で映画を撮らないためにも、同じ世代でつるむばかりではなく、上の世代と格闘したり、逆に下の世代から刺激を受けたりして、たくさんの経験や思いを感じて欲しいですね。若い頃は、発想力や着眼点はあるかもしれないけれど、失敗から描けるものがきっと少ないから奥深いものを撮ろうと思っても、それはヘビーかもしれない。だけど、年齢を重ねると発想力が衰えてしまう分、経験値が圧倒的に増えていくから奥深いものが作れるのかもしれない。なので、たくさんの経験と思いを感じるために、若い頃から意識的に常に全方位体制でアンテナを張っていくことが大切だと思います。

これからが本当に大事になってくると思いますが、お互いに人として成長して、映画人として一緒に頑張りましょう。

“自分の言葉”を持って欲しい。

若い世代を見て何か感じることはありますか？

説教臭く言ってしまえば、人間対人間の会話が少ない人が映画を撮っているような印象を受けます。ゲームや漫画等のサブカルチャーの分野に詳しいことは分かるのだけれど、会つたら「おはようございます！」と挨拶をする。先輩や上の人と接する時の言葉遣いが出来る。など社会で生きていくための基礎が、結構大事なものだと感じています。そういうことを置き去りにしてしまうと必ずしづべ返しがどこかで来ると思いますからね。だからこそ、人間対人間としての会話や対話がもっとあつたほうがいいんじゃないかな。だって、そういう基礎が出来ていなければ、作品中に崩すことなんて決して出来ないし。カメラや編集、テクノロジーに詳しくなることは、誰でも訓練すれば出来るはずですから、その前に人として基本中の基本がしっかりと出来ている魅力溢れる人であって欲しいと思います。それは、僕自身もそうでありたいと思っています。

これからが本当に大事になってくると思いますが、お互いに人として成長して、映画人として一緒に頑張りましょう。

また、自分の言葉を持って欲しいと感じています。先輩から聞いた知識や言葉を自分で咀嚼することもせずに、あたかも自分の言葉であるかのようにそのまま言ってしまう人。自分でモノを見て感じて選ぶことこそが原点だと思うし、自分が撮りたい画を現場で共有しなければならない時には、説得力のある言葉がなければ人を動かすことなんて出来ませ

主催

JCF 学生映画祭実行委員会

協賛

ベネトンジャパン株式会社

株式会社マンダム

CINE VIS 8&16

DENON 株式会社デノンコンシューマーマーケティング
セイコーエプソン株式会社

パンフレット協賛

株式会社アルバイトタイムス

大塚製薬株式会社

東映株式会社

マイクロソフト株式会社

株式会社毎日コミュニケーションズ

オフィシャルプロードバンドパートナー

CAMPUS NAVI .com <http://www.campusnavi.com>

協力

有限会社ニューウェイブ

株式会社IMJエンタテインメント

株式会社ギャガ・コミュニケーションズ

株式会社ザナドゥ

株式会社スープレックス

株式会社ファントム・フィルム

株式会社レジェンド・ピクチャーズ

株式会社レン・コーポレーション

AMG エンタテインメント株式会社

アルゴ・ピクチャーズ株式会社

株式会社ランブルフィッシュ

ESP/UTB 映像アカデミー

東放学園映画専門学校

東北新社映像テクノアカデミア

株式会社パル企画

株式会社エンジンフィルム

株式会社エンジンネットワーク

株式会社GETTI

後援

財團法人川喜多記念映画文化財団

社団法人日本映画テレビプロデューサー協会

社団法人日本映画テレビ技術協会

社団法人全日本映写技術者連盟

協同組合日本映画・テレビクリップター協会

協同組合日本映画・テレビ編集協会

北海道新聞社

河北新報社

西日本新聞社

台東区教育委員会

クレジット

Credits

JCF 学生映画祭実行委員会

実行委員長 高秀蘭

プロデューサー 太田雅人

JCF 学生映画祭事務局

事務局長 水戸直人

事務局次長 鶴田菜生子

公式パンフレット編集部

富永敬

高野祐樹

赤穂裕也

植木司

大輪葉子

岡野絵美

長悠里子

鎌野洋行

小林翠

櫻井涼太郎

式地知美

長坂陽一

新垣M.智史

藤川沙良

藤林遼太郎

古戸佳奈子

堀木聰

増田憲一

山中羽衣

山中麻莉子

軽部岳大

印刷

株式会社レーエ

Special Thanks

安藤紘平

池嶋徳佳

大塚めぐみ

小田多恵子

熊谷喜一

高野望

永田稔

南場雄二

渡邊啓子

和田幸子

早稲田大学広告研究会

第7回 JCF 学生映画祭 Official Web Site

http://www.campusnavi.com/jcfmovie_7th/

mainichi shinseaku navi
毎進学ナビ

まいにち!ナビ子☆

まんが☆いわきりなおと

これからの学校選びや進路探しは
インターネットが断然便利でござるの巻☆



毎日進学ナビに今すぐアクセスしちゃうのだ！

<http://shingaku.mycom.co.jp/>

<http://shingaku.mycom.co.jp/k/>
(i-mode, Vodafone live!, EZweb 対応)



モバイル版へは上のバーコードを読み取ってもアクセスできます。



モバイル版へは上のバーコードを読み取ってもアクセスできます。

ナビ子 スカオ

マイド！はじめて？

無料求人情報誌
「DOMO!」木曜号が
劇的に大ヘンシン！



maidol DOMO!誕生！

「マイド！ドーモ！」のシゴト情報は人気の条件だけ!!

すぐやる！短期！

10日以内、1ヶ月以内の
「短期のシゴト」をずらっと掲載。

すぐもらう！即金！

日払い、週払いの
「即金のシゴト」をばっちり掲載。

たくさんもらう！高収入！

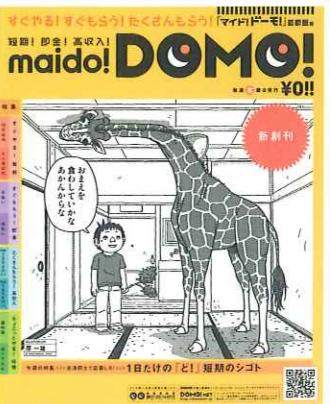
時給1200円以上、1500円以上の
「高収入のシゴト」をごっそり掲載。

ちょこっとやる！時短！

短時間、週1日OKの
「時短のシゴト」をちゃっかり掲載。

表紙が
楽しい！

人気マンガによる
力作の1コマが表紙
に登場。毎号作家が
変わります。お楽しみに。



●毎週木曜発行 ●駅構内、コンビニ、書店、スーパーなどのラックで
●インターネット、ケータイでも！ <http://domonet.jp>

バーコードでカンタンアクセス

バーコード読みとり機能のついた携帯電話で、右のバーコードを
読みとってください。※機種によって操作方法は異なります。

株式会社アルバイトタイムス

